



027481-000-1

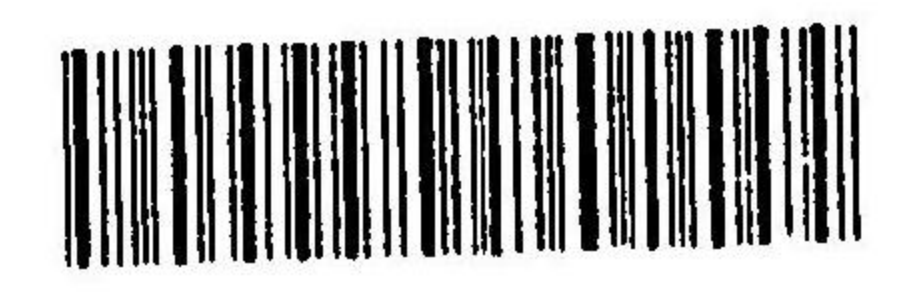
特26-768

芸娼妓評判記

草廼家牧牛/著

M23

ADJ-0263





111/2890 21

〇貳

く、あふささるさに思ひ乱れさるは、獨寝がちにまどろむ  
夜なきこそとかしけれ。さりとして、一向たはれたるかたに  
はあらで、女にたやすからむ思はれんこそ、あらまほしか  
るべきあざなれ。(下畧)

實に浮世は色なりけり。色なりけり。槐門貴族の公達の。車に  
も召されむ。如法闇夜と犯しての徒歩も。彼の君と思へばなり  
火と見て飛込む夏虫に、「アレー」と叫ぶ。うら若き乙女兒も。野  
干玉の暗闇と怖れどして。獨り急ぐは。彼の情人と思ふ一心の  
み。無垢の潔操。無礙の法体の傘一本にて追拂はれ。日頃忠義の  
白鼠も。襦袢一枚にて宿元へ引渡さるるも。皆色の由縁。嗚呼好

むにつけても。亦謹むべきは色欲。されど色即是空と悟れば。  
浮世も砂と噛むごとくに。此世に棲息む樂もなく艶もなし。先  
づ彼の聖人の曰ひし。樂んで淫せぬ心情もてるが肝腎ならぬ。  
我が兵神兩港も互市場とて。出船千艘入船千艘の大港。従ふて  
人の出入のいと多く。是等の浮れ鴉の男兒と弄ばんと。情と  
娼妓(藝?)と賣る藝妓。彼の後宮の宮女ならねど。其數三  
千もありぬべし。何れも月ヶ瀬に香ふ白梅か。吉野の山に咲乱  
れたる。櫻花の如き風情にて。互に色香と競ふ。其妓のよゝあ  
しは。各自好む處。蓼喰ふ虫の好々なれど。當地の粹客草廼家  
あるが。腕振はれしこの評判記は。朝を夕な。花柳の巷に。出

〇參

入する粹客醉士には。寔に色海の燈照らめ。我如き不粹ものに  
は。其月旦評の適るや適らぬは。固より不知火の鄙男なれど。  
草廼家あるトが。強てのことと筆と執り。下らぬ寢言もはしが  
きト。御覽被下ば幸甚。

花柳の巷に縁遠き。

溪間に香ふ。姫百合相手の無骨者。

明治廿三の歳

神無月

一ツ家あるト謹識

拜啓

兵庫神戸藝娼妓評判記御編述の趣きにて序言御もどめに相成  
拜見仕候御存知の通り何分にも不粹不通殊に金と女に縁遠い  
私し御批評の適不適は相分り不申候得共時々お目に掛つた姉  
はん達の平素の實際と比較仕候得者余り相違せしやう相見に  
申さむ候たゞ時々余りお譽め立てに成るのは貴君のお自惚よ  
り出でたるに非ざる乎と大に〜岡焼仕り涎れ三舛あまりも  
流し申候兎に角御批評の適否は追てお供仕り實地見分のやへ  
何分申上度候間時々御さそひ下され度此義は重々別して御頼  
み申上候其文章の流暢奇麗なるは今更ら申までもなく候に付

相畧し申候流石は色男の別看板浦山吹黄色を意氣吹き申候  
先は右迄草々不具

多聞通り邊ヤンチヤの隊長

ヒ一印拜

口序

「赤い湯巻に迷はぬ人は木佛金佛石佛」トハ古くさい文句だが  
誰れが言ひ初めたか色慾の浮世にてらしては誠によく其理と  
うつしたる言です其木佛金佛石佛にあらぬ諸君達が月の夕べ  
におもげり南枝の花とたどり雪の朝たに頭枕轉の娛愉快とな  
さるに聊かお徳用五三考にもならかんとホソノ評者の樓破心  
心のうちには必むしも人と怒らし泣るすなどいもとより好ま  
ぬ事なればトント取り得ぬつもりなりしも八釜しい哉世間の  
評判人の口には戸は立てられぬ十指のさすところ又せん  
すべもあらざれば或はブツ／＼シク／＼と怒るもあれば泣く

もあらんが人と別つて己れの痛さと知れ評者は書かん……世評は記るせ……藝妓や娼妓の皆さんは必を載すなど此二つの互ひ々々の思ふところと折衷し程よき場所と繫索する其氣苦勞さ……辛らさ……エ、マ、マ、假令紅裙連中が怒らふが讀者諸君が笑らはふが一切これには掛け搦ひなく暇にまかせた出鱈目と扱筆と取りし所以素より評者は粹史にもあらねば通客にもあらざる殊に文章家と自惚るゝものにもあらざれば文章なんどには一向無頭着……杯と高くもあらぬ鼻うごめかしては居れど定めて目だるき事の多からんがソハ讀者の通な心もて足らぬところ補ひかくしたまに當りし事あらばヤンヤ〜

の聲共に評判記の評判と評判よく言ひ布羅し玉はれ其上まだくお萬計として遊客並びに藝娼妓かの諸君の心得べき文も終りに綴りあればお目の序に見玉はれや假令ひとりにても數多く目の通るほど藝妓や娼妓方にも亦おのれに愧ぢて其身とつゝいみ其行爲と改め其業と勵むの鏡ともなり従つて遊ぶものはいよく大切にもてなされ勤むるものも亦自然と夢に牡丹餅みたやうな不思議な僥倖も出て來るもの取ればなど我田へ先に水と引く勝手理窟と言ひならべ例言のかはりやらお斷りやら序文のつもりにやら遁仕度やら何やらかやらに航あら可笑。

兵庫土堤下よて文章なんども白人じやと言はれて顔を赤うする……  
 何時もくろうの絶間なき未だ口元も黄色さる……乳汁草の家のあ  
 るじ

牧牛

○藝娼妓評判記

愛玉

中檢番

白水亭 予子笑閱  
 草廼家 牧牛戲著

山櫻の朝日は句ふが如く、芙蓉の皎月に望むが如く、梅花の雪  
 を胃すか如く、何ぐ如く、斯が如くと言ひ並べても小野の小町  
 中將姫さへ幽冥界うら降参し升たと端書をおこした位ひ  
 だかち述せも言ひ盡されないと遁口上を否胃頭をする別嬪  
 は愛玉です。寸笑へば無論顔中が愛嬌歩行けば足もとどが愛  
 嬌益をさせば其手が愛嬌寝轉べば此意味深し(腰)うら身体中  
 が愛嬌モリく頭のギリくうら足の爪先まで實誠よ愛嬌  
 で造つた人形否人間様だ。ソコであいさよ有けるあら玉の……  
 ト云ふところうら愛玉の名を附けたト誰れも言つては居り

ません……がッソナことは止して置き、藝の三味線御座れ鼓の御座れ太鼓なりと舞なりと、何でも彼でも一ト通りは中々甘いと承まはつた夕世評は、虚か……何分中檢では屈指の如さんなり。

### ○藝若君

兵庫柳檢番

顔は少し長く、目元キツパリとして冷しく、口元小さくして可愛らしく、脊はスヲリツツとして高く、誠々申分なき顔質、藝は別にこれとて譽ひる廉もあく、客に對しての進退も最一きは引立たざれども、今より其心得にて待遇法なり、諸藝等を勉強せば、後には天晴れなる藝妓と成るを得べし、若君さん、勉め玉へ……剛み玉へ

### ○藝米八

兵庫淀檢番

淀檢での大姐株、人も知つたる米八裙。八八好きで米といふ名

評

詮自稱か但し又、清元だけは眞平だが、常盤津御座れや話しても、笛でも何でもやッ付るト、八十八に八を加へた九十六手で客を待遇すと云ふ、お自滿筋で付けられたウ……眞逆にそんなヤ、クルしき言はれ、因縁のあることよもあらざるべきか、兎も角、こんあ駄洒落は暫らく置き、先づ一度呼んで御覽じ、随分ヤケで面白い姐さんです。

### ○藝長吉

福原仲檢番

客は未だ取つたことあしだ、イヤゑら有の丹波ありだ、イヤない、イヤある、どは長吉と對する或人達の評判なり。何しろ容色の中等の上部に位すべく、藝は此妓の聲と共に十分なり、待遇は他に抽んで達者ある由、イヨ一福檢での達藝妓……評判よし……喜び玉へ……(チト御馳走ぶりが有ますせ)

### ○妓娼揚卷

長谷川樓



顔ハオモ長にして十人並の容姿、春はチヨツクリ高く、性質は何となく活潑といふ風が歩行ふりにて知れて居ます。當樓に來てうら僅う半年余りです。ズイツと古顔を乗り越へ上席になつたそで、夫れうら推して見ると中々客の待遇に妙を得て居るに違ひありません、或人の話しには此妓は鬼齒が二本ニユツとも何とも言はずに、生へて居るそうだが眞逆な般若のやうなことも無いのでしようヨ……若し有つたらかしま

○妓花子

新川宮本樓

何處やらが田舎臭い風ありとは、尤も至極、本年六月初めて身を濁江の深き淵に沈めたるなれば……また裙捌きも見習ひ中それが却つて愛らしく、加之三節の方も何やらも、抜目ないとして遊客がうかれて行くも多ければ當時は小芳も其處のけ

云はん斗りの上人氣なりとの風評ハチト受取がたし

○藝君子

中撿番

嗚呼意氣地廢れたる今日、浮氣仲間にありながら、好評こそ立て厭らしく耳障りなる評判は一度も立つたことなく、中撿番では愛玉か君子……君子か愛玉か……云ふ位で、愛玉の方は日の出から、まだ二時間斗り経つた處、君子ハ四時間斗りも経つたところだから、如何しても経験がつんで居るかして、お情事もよく、藝も亦達者なり、言葉数は少ない方なるが、去りどて客と對しては、ツンとしたる形容もあく、能く娛機嫌を取ることに誠に感心あり……左様ならツ……

○娼一榮

澤山樓

當世風の丸ボチヤ顔、性質は至つて温順しく、他の娼妓の様よわたいわのお客は嫌らいやし……など、雑言を叩くことあ

評

初會でも、馴染でも、依估あしに取扱ひ、且鄭重にする等、容姿といひ、性質といひ、何處一點の打ち處ろあし、たい何時も何か思按体よあるの、十人なみの、お氣よ入るまいかと思へれます、若し心配らしい顔を、してをツてやと云ふお方があつても、如何も致方無御座候アハ、ハ、ハ、何のそれがいな……

○妓藝小鈴

中撿番

判

鴨川の水でさらした、容姿だもの、ソリヤようなけりやあらぬ、善處が此妓はアンマリ能くないのだテ。髪はチャレた方なり、藝も十人並といふところ、藝食ふ虫もすきくどて、誠よ南京オット違つた南瓜が大の好物と云ふ評判だが、ソナナによく食ふのか知らん……

○妓媚明山

色葉樓

此妓元と青柳樓とかで小櫻と云ひしものよ能く似たりと云

評

ふものもあり、果して同様に勤めて居りしことありや否や、若しも此妓が其小櫻でありしならば、容色は十人並なれども、少しく鼻どろ、何處か一の瑕瑾だど云ふ話し、だが併し愛嬌も、ので客を待遇あす段よ至つては、不思議の腕前があるうら、夫れで其瑕瑾も差引勘定濟グ出来るといふ、明山よ々々々、苦し青柳樓よ居た小櫻と違つて居たら……おまはんのとで、ハハハ、ツせんから、誤免なんし……

○妓藝小半

中撿番

判

此妓和漢の學に通じ、自在に文を作るの才智を有すと、過般花柳憲法草按を作りたるも、此妓なり、誠にわらい妓はんやと承はる。辨舌よ至つてハ立板(或は横板か)よ水の流るゝ如く、蘇秦も洗足で遁げ、張儀も一步を譲ると云ふ實に、藝妓中の勇辨家誠にて、わらい妓はんやと承はる。能く事理を辨へるの才を有し

ながら、怨氣澤山にして以て衆客を待遇するに偏頗の沙汰あり、誠に似らぬ。妓はんやと承はる。若し果して評者が承はつたるに相違なしとすれば、誠に似らぬ。妓はんハ……妓はんやガ……何ぞ僅かに文才がある。うらつて、僅に演説位ひをするからつて、肝要客の待遇、差別すると云ふに至つて、余り譽められた次第で、御座らんが、或はそれでも藝妓の本分を盡したものでしよう。ナント、そんなものでしよう……

○舞留丸

福原中檢番

「留丸はん一寸、今檢番へ姉妓を捜がしよ行たんやけど、誰れもアキ手がないのやがな、ハッソ、無けりや仕方がないやおまへん。私一人で引受けます……でも大方甘人も……よろしいッ姉はん、心配しなはんな、私いやつて見るし……」コハ或る樓の女と留丸妓との話し、ナア吉せん留丸はんの中々似らぬ

評 判

妓やナ……吉せんハ差身庖丁を下置き舞妓の内ですへ誰れでも舌を捲いてゐるのに、一人前になりやハつたら、どんなでしよう……「ハッソ、藝は十分なり、口は甘まいし何人でも得心さしやハるは」トコハ是れお燗番と料理人との話し。知らず留丸は後日如何程な藝妓になるかそれが見たいものです……

○娼妓桂木

愉快樓

「仮初の遊びも、玉の輿上手車と、持てはやされ玉ひし身が……」ト襖隔て、聞くふしも、身にしみぐとこたゆる悲しさ、両親が元どの儘であるならば、妾じやの自らじやのと、大衆の者にかしづかれ、姫君よ姫様よと、云はる。此身でありながら、人も賤しむ此勤め、嫌なものにも笑顔を賣り、機嫌氣づまを取らねばならぬとは、如何に時世とは言ひながら、身の零落にも程があるト、ハ言へ爺父さん慈母さんの、難義あさるを目の前に

判 評

評

見るに見兼ねてコウして居れど、思ひ廻はせばあはらしいやら  
かなしいやら……アヤといふて勤めをおろそかにしては、愈々  
年も永引く道理と、吾と吾身をいまして、忍び泣きつゝ勤め  
て居るか堂だう……中々客の待遇もよく、お客も澤山つくそう  
です、併しこんな身の上でなけりや、此胃顔は早速取消申候と  
中檢番

○藝助八

判

容姿は十人並にして、藝も亦十人並、ソソならモ一言はんでも  
いと云ふやうなものだナ、ダガ中々清元のお上手……至極妙  
……奇妙奇轉烈……不思議をお腕前、アヤ十人並より優れてる  
じやねへか、イヤ外の藝と差引勘定するとヤツパリ十人並じ  
や……」ト道路の風説。

○藝若吉

兵庫淀檢番

「君、疵檢の若吉は知らないか」ナニ若吉、僕は未だ知らぬい「君も

評

判

余程野暮的な男だね、柳原で始終遊ぶなんて、彼の意氣込のあ  
る若吉を知らんどの、柳原を知らんのも一所だよ、ソリヤ残念  
だ……如何云ふ風かへ……「サア年は先づ廿二三で容色は中々上  
等で、藝道の中々達者で、中々お辨茶羅で、中々愛嬌もので、中々  
平凡藝妓の及ぶ處にあらすサ、フーンおら、中々付の尤物だ  
子、シテ心は……」ナニモ謎かけはしちや居あ、フ、イヤ性質  
は如何だと云ふに「ウ、性質うい、ソリヤさつぱり物の氣概  
もんだよ、去年の評判記にも、ナ、それ、サツパリとして且氣概に  
富むとか何と書いてあつたが」ト二人の話しを聞き居たる  
今一人は、ツツく笑ひながら「フ、一サツパリ」ト鼻であし  
ろうて、行き過ぎましたが、如何いふ譯か評者は知らず、判断の  
讀者に任せます

○娼種榮

真田樓

ア、アノ眉毛の太さ……黒さ、アノ額ひたひたの肉にくの多おほい……高たかさ  
 総そう体たいポツテリとして、カンクの上うへ置おけば何時いつも秤かり量の百  
 八十磅ポンド（誤ご）日本にほんの目め方かたで申まをせば二十一貫くわん六百目め位の處ところ  
 に居ゐるを見みれば、又また以もちて其そのドツサリなるを知しるゝ足たる餅もち志しな  
 がら何時いつも四五枚まい目の處ところに……疊たた二枚まい敷き程ほども場ばを取とつてツ  
 クチンと坐まつて居ゐるを見みれば、他人たにんの知しれぬ御手おて際ぎわありと覺おぼ

○妓房鶴

中檢番

容姿りやうさは十人並じふにびの處ところ、品格りかくの少すこし高たかき處ところで、チト引ひ立つべきか舞ま  
 のお上手じやうずなるところを以もちて、仲間内なかまうちでは舞鶴まづる々々々々と言いひはや  
 すと承うけたまり、或あるは合あひ舞まに長おほじて屢々しばしば客きやくと共とも頭あたまを獅子舞しし  
 ゝ振り舞ますの舞まか、兎うに角華かくわ美衣裳みいしやうを好このむの癖くせあれば、若わかく見  
 へるだけでもお徳用とくようッ

○妓千代

兵庫柳檢番

流石りやうじは有名ゆうめいの才子さいし○先生せんせいの養女やうによ……流石りやうじは西京さいきやう女學校じよがくの修しゆ  
 業生げいせい……温順おんじゆんくつて愛嬌あいせうがあつて、言葉ことば敷敷が少すくなくつて、柳やなぎの腰こし  
 に月つきの眉まゆ雲くもを欺あそむ髪かみの毛けも、瓢子ひやくこを並ならべたやうな齒は、色いろが白しろく  
 て脊せはすらり、何なに一点いっの打うちち所ところなく僅わずかか十九年じゅうくわんねんの齡いよて……  
 出稼でせぎ以來いらい二年に足たらず……始はじめ終しまひ柳檢やなぎけんの上席じやうせきを占しむるとは、お  
 容姿りやうさといひお手際てぎわの程ほど、イヤハヤ感かん々々々服ふく々の外ほかなくいし、併し  
 なから十八年じゅうはちねん暮くれに、兵庫ひんがの豪商ごうしやう古長ふるちやう者しやのお爺父おやぢさんさんに、始はじめ  
 て……といひ少し真受まうけゝは出来できんと思おもはれますが、併し……  
 ○妓玉章

新川繁榮樓

世よの中なかの人のこゝろは飛鳥川あすかがは淵ふちは瀬せとなるからひとや過あし  
 御ごげんの陸言りくごんの身みにしみぐと忘わすれられず、夜よなくかほる大たい  
 盡じんの中なかにも君きみは一入いっしよに、いとしとおもひ可愛かひいと、思おもひみだる

黒髪も、どりあげがみの中々、君が心のうら風、杯トやさしく持込む、お手管筋の上手より斯く玉章と附けたる、如何だか其處らは評者の探訪チト行届かざるが、コレ又一箇の老練家、新川よては随分屈指の顔、這入る尤物さうな。

○娼梅ヶ枝

松浦樓

娼妓の品評すれば、先づ第一に上るものは此姐さん、大店十軒のお職を並べ見る時は、此姐さんはズット頭抜ての別嬪此妓中々客を待遇すこと、上手なり、左り逆決して玩弄物にせず、溫柔くして人の氣に逆らひざる(情夫はいざ知らず)は皆人の知るところ、殊に大衆の出入りまで大抵の梅ヶ枝の印半天を被せてをるところを見て、此妓がチト意氣地を顯らすと云ふ、性質あることを知らるべし、何時か兵庫の何とか云ふお客がよくないものを進め様と思つて色々と謀計んです

評 判

んでのことには……イヤ中々ソナニ乗る姐さんとは違ひます  
チー梅チヤソ……

○藝三 八

福原仲檢番

昔し昔しの其昔し、老爺と婆々どが有つたどさ、それでも若いときに、矢張り若かつた……とは何だか小兒を弄ぶ様を冒頭だが、此妓の若い昔しに、容色は勿論藝道まで、人並優れて随分流行妓の仲間入もし、情客の五人や六人は、何時も離なした事なしと云はる、身にも、明けて悔やしき玉手箱、鏡に向ふても恥かま、情客沙汰も出来ぬし、左ればこれより藝道斗り、で渡つて見ようと、腕をまくつて、座敷に出づれば、若い藝妓の嫌らしきより、淡泊として又一入妙味ありと、自稱通人は話せり、此妓藝道は福檢での一等なりとの評判なれば、夫れも其等。

○娼初柴

寶勢樓

(十六)

判 評

元と岡山とかで藝妓を勤めて居たものッーが、何故に娼妓の方へ仲間入したるや、委敷とは存せぬッ、藝妓をして居ただけで居續の朝、十八番の新内で以て鼻下長先生を蕩々すと云ふ寸法、中々客の待遇工合ひの宜い事は妙なものです、私し向ふよいきようたら、貴公がきようてと云ふ程にもないが、時々方言の出るハコリヤ仕方がない、顔は丸手で大體の方、同樓の錦の實際の姉さんだが、容色は大分妹分、氣輕るな處は矢張り姉さん。

○藝小歌

中檢番

姿色は十人並よして、技藝も別に抽んでたるところは無いが、身体の肥へたのと、性質の温良しきとが、先づ此妓の長所とすべき点なりと聞けり、左すれば最一つの道にも、おとなしいか

どの問よけ、チト返答しうぬるうら、ソハ皆さん、御勝手次第に御評をあらわす。

○娼玉龍

澤山樓

判 評

其容姿よ付ては、別よ是れと云ふて良き所もなき換りに、又別よ悪いと云ふて、指さしのする所もなし、兎に角其眉目の間に秀然一種の愛嬌ありとは、恐くは何人も許す處ならん、未だ二十に足らぬ年よて、別嬪(或ハ劣嬪)中々揃ひの澤山樓よて、始終二三の席を占め、隠然一方の旗頭として、他の老妓達を凌駕するは、第一の証據なるべし、殊に性質は至つて温順しく、其雪の朝に...雨の夜に、火鉢の傍にて爪弾する模様、舞踏を演ずる時の様子、宛然一箇の令嬢として、恥づる所なきものゝ如し、唯だ岡山言葉に少々甘へた言葉を交ゆるは、如何はしけれども、情人の目くら否耳くら聞けば、是れ亦一種の愛嬌ならん乎。

(十七)

兎に角尋常普通の娼妓とは何處かに、差ふ所あるに相違な  
るべし、余り譽めると、玉龍先生の鼻う高くなるから、先づ此邊  
にて、筆とめ(り)し

○藝若勢

西檢番

西檢番の別看板廿余名の大頭領、何程年を取つても若勢で乙  
な洒落何時も變らず、平氣。へい狐蠻話のお世事ものは此妓な  
り、容色は十人並なるも、一度び唄へば直に治郎をして、涎を流  
さしめ、二度弾けば、忽ち痴客をして精神を失なはしむる、特有  
の伎倆を貯ふ、品格の点に至つては、兵神中是れが右に出づる  
ものなしとの評判、或ハ眞乎、頃日不幸にも指を害し、コレ如何  
なる譯にや眞逆鯉の料理をしてとも云へまいが、疑ひは姑ら  
く措き、三味線を引くと能はざるも、亦以て座客をして、淡蕩せ  
しむと、誠よ奇体なお腕前かな。

○娼婦緑

愉快樓

生れハ紀州で、大坂南で、小半とかちのつて勤めて居たもの。容  
色は極上等の部類、加へられ、風姿も悪くない方で、一目見た  
ものは忽ち涎れ三千丈、好んで此妓を揚ぐるとは揚ぐれども  
滅多に再度をかへず人がないとの評判、コレヤ不思議だ、容  
色が好くて、夫れ程お客をよう取るものが、何で再度がさかん  
のたろう……ロクく首ッて、首が長く成のかい……寝た風を見  
ると尾でも出て居るのかい……蛇にでもさるのうい、否中々左  
様ものなら、ヨモヤ當樓も置きはすまいが、チト手……エ……  
エ……エライ言い難くいナ……ウー、アノ調子が……

○藝照歌

兵庫淀檢番

エー變り合せまして、娼機嫌を伺ひまするお落語は、拙妓の匿  
し藝ですくら、一寸鼻安うはか聽せ申ことは出來ないですが



皆様の誤所望と申、殊に毎月三四回も大坂にまいりまして、落話のお師匠さんに、しこんで貰ひました甲斐に、中々上手に成ましてへ、前口上は差し置まして、ト口話しと出掛けましたよう、エ、此處は兵庫柳原、遊廓街だけにドンチャン、ト賑はしく何處の家を見ても不景氣といふ木は枯れて仕舞て、夢にも見たことなしと云ふ塩梅、折柄通りか、つた別嬪は、口元は尋常で、目付と性質も何となく温順しく、丁度私ゑの様に、お心よし、此別嬪を見たる若者は一人の若者に向ひ、堂たへ別品だね、藝も中々しつかりえて居るせ、ウ、別品だね、アリヤ、徒か、淀檢の藝妓だね、フ、ン夫れじや君も知つてゐる、失敬、サア浮いたく、エ……

○妓娼小町

色葉樓

容貌は無論小野の小町は及ばざれども、客の初會と馴染と

判 評

よ論なく、能く款待することに至つては、中々感心ある腕前あり、此妓原と大坂にて藝妓たり、當時名を種香と云ひ、後柳原に轉籍し、鶴香と呼びて、矢張り藝妓の業を營み居たりしが、故あつて商賈換をして、扱當樓は顔を出せえなりと、故に流連の且爪弾き位を好む人は、早く行くべしです。

○妓娼市鶴  
福原十軒  
福田席

大店やうらつて皆が皆迄別品と云ふに非ず、小店やうらつて皆が皆迄悪いと云ふ譯にも行きません、此妓の如きは、容色と云ひ、何斯に茲等に置くのは、實よおしい代呂物客を取るといふ大店の中部位ひの妓に劣らず、サア十軒へは鶴が下りると、ハア福田は、ヨイ代呂物を抱へたと近所でも寄ると集ると此評判ソ、あがソ、ナニ上物が何故……うと段々探つて見ると、客を待遇すのは上手でも、客を見るとときに、チト調子が悪いと

云ふが、或ハ眇目か……或ハ醫ウ堂だう、若しもそんなことなら  
當樓に居るのも其咎でげす。

○妓藝  
兵庫柳檢番

評 判

殆んど十余年來當地にありて、未だ一の悪評を立てられず未  
だ上席を下りたところと云ふは、いどの外に誰も追付ものは  
なかるべし、此妓は客を待遇すると尤も上手なる由、流石の御  
年柄だけ感心仕る、品格に至つては大家の奥様も洗足で遁ぐ  
るべく、腕前の如きの無論一点の批難すべき点なし、是れでこ  
そ柳檢の親玉……是れでこそ四十余名の総括……イヨ一藝妓の  
取締役。

○娼若種  
真田樓

福原の遊廓でも、松浦樓の梅ヶ枝か、真田樓の若種かと云ふ程  
よ名を挙げ今日までも能く其地位を保てる内にも、此妓は梅

ヶ枝よりも、御年柄だけ客を款待すの術は、余程長じたりと  
容姿に至つては、評者の言ふ迄もあく、疾くより皆様の五承知  
なれば、茲は省く、未だ五存知なき方へ行つてごらん、ソレハ  
の全盛です。

○娼若人  
成田樓

評 判

原西の宮の生れで、不才した事より大坂新町の佐野席へ浮い  
勤めよ出ましたが多き娼妓の其内にも此妓は誠よ正直者で  
すから主人も内娘同様と思ひ時々は金銭の出納まで委せし  
位、ソレテお客も澤山取るものから、時もなくお職の地位に  
登り、夜な～か、はる添臥の數限りない其中よ、いとし可愛と  
思ふたの、或る吳服屋とウ木綿屋とかの息子殿、これも此妓の  
氣質よ惚れたか互ひに惚れて相惚れられて、未ハ野とあれ山  
とあれ、晴てこうして暮すなら思ふ心がかチ合ふて終に身受

の相談とこのひ、暫時の内の詫住居と、差向ひの氣兼ねなしで暮して居ると聞きたるに、如何した譯か今又此妓を當樓に見るとは……容色は十分なり流石は新町でお職迄勤めて来た身の甲斐には、客の待遇もよく日を経ず又いとお職も登りを由、不思議さは月に二度……三度か、お客でもあし夫でもなしと云ふ様子がはるくと遊びに来るそうだが、何か知らん是れは定めて兄さんなるべし、兎も角上人氣なり。

○藝長吉

中撿番

藝も相應にあり容貌も亦見よくからず、愛嬌も相應にあり、品格も又余り低からず、花も相應に售り評判も又悪からずと云ふは中撿の長吉なり、猶一段奥の手を探らば中々の秘密藝ありと聞きしが、評者は何か知らん……残念ながら……

○娼若君

澤山樓

澤山樓中にて別嬪は誰れかと問へば、先づ指をのみへ(本名)姉はんよ屈す、姐はんの目のパツチリとしたる所、鼻のスーッとしたる所、口元のシマリとしたる所、脊の高うらす低からざる所、中々尋常人の及ばざる所なるべし、此容姿の良いのが此姐はんの疵……營業から四年の間、今よお職の地位よ登らぬ譯柄なり、何となれば姐はんの娼容貌を鼻よかけて、少し天狗振り、お客よ對して余程高慢よ構へ込ひ、ダカラ普通のお客は大抵は腹をムツ立て、歸るからあり、申し姐さん今少し萬事お上手にござりませよ、序ながら申す近頃は下山手の娼妓屯集所へは、相變らずお通ひよなるや……否や……

○藝八重吉

福原仲撿番

「燈火の消ゆしよりアノ八重吉を、どうがなと思ひ付しが身の因果、どうぞお慈悲よこれ申、今宵のことは此場切お年寄られ

しお前よ迄心をうけし不敵の罪、おゆるしなされてト、しなだ  
れかゝる容あれば、スハと身構へ兼て用意の臂鐵砲、ボンと一  
發さあらぬ顔、ア、コレ且那樣とした事がわッけもない其お  
詞、今廿年も若ければ、又……ウーンと言はぬものでも御座んせ  
ぬが見られた通りの此姿々が、どうまあ……と申すべさう極く  
色氣なしの……おもしろい老妓ですが、若い時よりお世事も  
と評判よし、殊に義太夫よりは丹練して居るといふから、上手か  
下手か呼んで見玉へ。

○娼歌之助

色葉樓

温順くして言葉少なで、脊のストラリと高いところを見れば、ナ  
ル程、是れが色葉樓のおいらんうと思入れるが、一度来たお  
客が二度と来ぬと云ふの、ハテナ……何故か……深い様子のある  
ことならんが疑ひ、姑らく措き、唯其床の中で時く日本慣れぬ

言葉で「アノお前を山手に……と言ふを聞くのと、右の手……指  
よ、癩の出来て居るのどが、愈々不審を起す点です、若しや此妓  
は元と揚弓屋に……か、如何じや評者の言中つたか……よいさん  
アザヤカ……」

○藝王子

兵庫柳檢番

性質剛膽よしして一步をも他に譲らず、一度は癩癩玉を起すと  
きは、一座の妓をして爲めに口をつぐまえむると噂するもの  
は玉子なり。眉の黒きと目元のキツパリとしたる處に、如何も  
いふよ言はれぬ愛嬌を含みたりと噂するものは玉子なり。曾  
て大島某氏が、手活の花と眺めて居つた、古手じや……アレハ夜  
店代呂物じや……丁寧に外面を見るとき、チト瑾がある噂する  
ものは玉子なり、技藝中清元のお上手と承はつたれば、一度び  
招ひて腕前を試みると同時に前記の噂に相違したるや否や

をお試しささいと云ふものは評者なり。

○妓娼小芳

新川宮本樓

顔はチョツクリ長く、色ハエツクリ白く、愛嬌タップリの尤物とは、これ小芳を見たる自惚評併し余り頭抜けた容貌にもあらざるべきや何れもいたせ品格の点に至つては中々素人の奥さんも及ばぬ位ひなれば、無論新川中最高等の地位を占むるならんとは世評の儘、いつぞや情人の爲めに子を妬みたるとありとて、人々愛翫せらるゝ由なるが、果して情人を除くの外、何人にも公平に眞實を盡すの行爲ありや否や評者之れを知らず。

○藝仲助

中檢番

原柳原は籍を掲げたるとありとて、容姿は先づ位ひで少し品格の有る所で、高振つて居るのか……高振つて居るから、品

評

格があるやうに見へるのか、兎に角藝は十人並のところ、義太夫が少芝上手なり、何分性質はおどなしいと云ふよりも寧ろ陰氣と云ふ方に近いと聞けど如何にや。総て女の好きなは、芝居、蒔蕪、芋、南瓜、と云ふが、此妓は南瓜が第一の好物それで……余り食い過ぎて腹……にでもあつたのか、頃日は大變瘦ッユケて居ると承まわつたが……如何だか。

○妓娼白糸

色葉樓

顔は圓形にして色白く、目清らうよしして鼻高く、客を待遇すること誠じ上手にして殊に奇く妙くの辨をふるつて、客の心を蕩かすに其妙を得たる由、眞手よか手管ものと云ふべし。

○藝三木松

中檢番

最早容貌で售るといふ年頃でもさいが不幸も天然痘の神に惚れられ、一穴何程と云ふ位ひ、高ひお金のかゝつた顔です

藝は一人前は十分達してゐる、其待遇に至つては、誰れにも彼れにも、公平にするので誠に上人氣あり。

○妓娼久治

愉快樓

容姿は余り上等又あらずして、非常又肥満したるものは久治なり、此妓ツントしたるどころあるのが、ツント一見客には氣向が悪いと云ふ風説、或は曰ふ、ツントしたるの此妓の手管にして、再三再四と追ふは實情を顯はして、客を沈溺せしむト依之視之(六ツかしいナ)誠に不可思議、奥の手の知れぬお腕前と謂ッべし

○藝若吉

中檢番

元と柳原よて小萬と呼し事あり中檢に轉つて氣が若うあつたか如何だう、若吉と名のれり。風品もよくなし、姿度も亦上等よあらずとは、反對客の評判か、藝の方は一人前越ゆるうへに

舞が上手と来て居るうら、申分あうるべし。

○妓娼雛鶴

色葉樓

脊が小さきだけ夫れだけ汝の膽玉が大きくある、目が丸きだけ夫れだけ汝の根性又角がある、夜半シンヨリとしたる頃、客と角火鉢に對座したる時、何時も少し横向きに坐り左の手を帯の間に入れ、右の手にて長煙管を取り、左の袖を一す口に咬へ、七三に伏ひいて額にえわを寄せ、お得意の眼玉でワロリとお客の顔を睨むときは、イヨ一色葉樓のおいらんど云ふて恥づる所なきもの、如し、是れが此妙齡にて時薄雲其他の姉はんを凌駕し、お職の位置を占むる故ならんう、併しなからもしお自惚のお客あらば随分お穴の毛の誤用心を……

○藝歌子

中檢番

容色よ左のみ点の打つところもあく藝道とてもマアく

一ト通り位ひなれば、コレモ左のみ譽むる譯にもまゐらざれ  
 ども、此妓の性質、アンマリ毒氣あきのと、客を待遇す一段に至  
 つては、能く衆多を悦しがるせるの伎倆を備へたりと承はり  
 しが、是れとても悪く申せば、此妓の情人だけを喜ばすのうも  
 知れず、併し評者は何方とも申しませんから、其處はよるしい  
 やうに。

○藝政 吉

兵庫柳檢番

容色と技藝は余り優等よあらざるも、最一つの戲道に長ずる  
 を以て其名高き、此妓中々の經濟家として、只さへ綺羅を飾る

商賣柄に似合す、余り飾らざる方なれども、自分特有の風致を  
 以て之れを補なひ得ると云ふ点に至つては、随分徳用なる身  
 体と云ふべし。已れの艶謀も長じたるを鼻にうけ、無暗に他人  
 の情客を横取りすると云ふ噂もあるが、如何か左様な愧聞の

無いやうよしたくないものですな……

○娼若 浦

成田樓

大坂新町佐野席に勤めて、若人の妹外なうしは此妓なり、不  
 議にも今又當地で同じく勤むるとい、前世よりの約束事か、何  
 かば存じませんが、此妓容色は十人並一寸越す方で上品な風  
 です、出ると間もなくお職にまで登りしところでの、随分お客  
 の待遇も宜しいのう、其後若人が出てから、終に席を譲つたッ  
 ！ですが、何も姉さんだつて構やしません、ドンドと勉強して  
 姉さんを泣くしておやり、お前は氣が弱いから仕方があるとい  
 左る、最負筋のお方が、迂遠そうよ……

○藝 葎

り

中檢番

顔の少し長き方にして、色少し青く、前齒少し出たる、少し付の  
 別品だが、何も顔で藝妓が立つて行くものでないからと澄し

た顔で座敷を勤め、座客をして満足せしむるものは柳あり。此  
妓や藝道と申せば何一トつ悪評をいふ廉もなく、座敷よても  
藝説がうつた話は、大の禁物と來てゐるうら、自然上品に見  
ると申すこと。

○藝若朝

兵庫柳檢番

掲籍三年を出でずして負債を償却し、今は却て貯金しつゝあ  
るものは誰ぞ、曰く若朝姐あり、此妓顔長く、脊普通にして、肉太  
く、絶美といふよあらざるも、又中等以上の態度あり、伎倆は餘  
り感ずる處なきも、唯諂辭と彼の雲を呼び雨を降すの術に至  
つては、他妓の窺ひ得ざる長処なりと、宜あり此妓の容貌にし  
て此秘術ある、掲籍三年を出でずして、負債を償ひ貯金しつゝ  
ある事。

○藝若鶴

中檢番

若鶴姓は矢阪名は花若鶴は其藝名あり、家は東京に在りて父  
魚商を営めりと云ふ、若鶴は先年母に隨ひ當地福原より來りて  
貸席業を営むや小花てふ藝名を以て福原町に舞妓たりしが  
昨日の淵は今日の瀬と變る不幸の打續きて、遂に福原の業を  
廢して今の元町へ住み換へしと、なん若鶴性質活潑よして能  
く客を遇すれども、亦忌嫌を避けへるヤンチャものなり、然し  
て其風姿の如きは、色白くして、脊高からず、低くらず、絶美と云  
ふにあらざるも、又以て容心を蕩りすに足る、伎倆に至つてハ  
編者未だ詳しうせず、雖ども、又普通の伎倆はあるならんか

○藝若力

中檢番

先づ此妓等の檢番でも一寸した位置、容色も藝も共々十人並  
なるが、其膽太き風に至つてハ、誠々驚くに堪へたるとあり夫  
れに付てか如何か知らんが、代言人藝妓の譯號を付けられた



りと、如何よや。

○藝小吉

福原仲檢番

評 判

此妓は容姿を售る藝妓よあらず、藝を售る藝妓なりと……(チ  
ヨツと待つた、藝妓が藝を售るのは當然だ、ソレノに何故仰山  
鱈敷、書くのだエ……エ……ナニ容姿斗りの藝なしが澤山あると  
……フム……ナニ其内よも、此妓はわかしあ方は一度も售らぬ  
と……フム……感心だな……其藝道の中々、お達者で福原檢番でも  
一二を争ふと云ふても、差支あさ程、性質はヤケで……お酒に酔  
つての、イヤハヤ何ども……

○娼此糸

千石樓

中肉中脊、目はパツチリとして清らうに、色はコツクリとして  
白く、風のチヨツクリと婀娜ボク、待遇はトツサリとして客を  
悦しがらせる、眞の御手取もの(?)

○藝ふく

中檢番

鬼も十八蛇も甘襷茶も……(オットくわばらく)蠻入花も(六ッ  
うし)表花とて、並尋常の娘でも可愛らしい花盛り、況して花柳  
社會は、衣裳から持物うら、何うら何迄飾り立てるから、ソリヤ  
よく見ゆるも尤もだわい、それに余まり飛付く程よもないあ  
あ……「ユハこれ道路の風説されば信じ難し、實際のとは呼んで  
お試し、オット忘れた、此妓は土地藝者なりと聞きましたから  
一寸序に

○娼娼鶴羽

勢陽樓

ナニ、一昨年初めて此樓へ出たと、嘘を言ふな三四年前に三巴  
樓でお職の上位を占めて居たのは姉はんやおまへんか、餘り  
嘘を言ふと以前のとを申しますぞ……ナニ、芳原に居つたとは  
ないト又嘘を言ふ、彼の○○氏又受出されて大阪へ来てトド

判 評

のつまり大枚の金を貰つて離れたのは姉はんやおまへん  
う、夫れ見い……隠せまいがナ、ソウ隠さずに言へば、よき所はよ  
いと云ふてやる……ナ、近頃は貧乏したトソリヤ仕方がない  
お前の様は義狭心を出して貧乏のお客を救てやれば……併し  
もう三十越へた年だから、若い時とは違ひ、額の皺が増へるだ  
け、お客の足が減るうらして、容姿の良いのを跨らずに今一層  
待遇を丁寧にして二度の全盛……葉櫻でも宜しいモ、一ト花  
ドッコイ一ト葉、開くせる様にしなれ……ナ、承知しました  
トヨシ

○藝小龍

中撿番

容姿は中等の部として、藝は舞がお手に入りたりト、三絃の方  
は余り感心するほどにもないそうなり、性質は柔和なる内に  
何んもなくピンとしたる處あり、客を待遇すには何時もおぼ

○娼色葉

色葉樓

こいやうなをしてゐる由、或は此妓の性質よよるのか、又は  
此妓の手腕筋か、どないやわたい、ちらんし。

判 評

福原遊廓中第一等の樓と申せば色葉樓でケす、いろはハ當樓  
のお職株です、御存知の如く第一等の樓のお職だつて、ソナ  
よ頭抜て別嬪といふ譯でもありませんが、顔長く色白い方で  
随分別嬪です、殊に其性質よ至りてはサツパリとして、客よ對  
しての待遇ハ無論仲間中よも自分の地位を鼻にかけるとい  
ふ様な風は、微塵程もないです、是れでこそ第一等樓のお職さ  
ん……

○藝せん

中撿番

是れも若い時よは随分名を擧た別嬪さうあが……色はチツク  
リ黒く、顔はオモ長、性質はチツトヤケ、藝は一人前なれば別よ

申分ッてはないが、誠、物、倦き易い風が、一ツの瑕瑾です。此  
 妓、チト鐵道臭ひが、或は其邊の人に關係があつたので、まよ  
 う、オット未だある、金神様にうけたら強い信者……金神おせん  
 の、諷号を付けても、差支ない位ひだつ、高天ヶ原よと祈つても  
 矢張り一つのさすは直らぬものかいナア……エ、ナニとんじん  
 さい、あはらせんと……

○妓若梅

若松樓

西の宮に生れ、當樓に顔出せしときは、體か三ツ葉と云しもの  
 由、後何が故に若梅と換へしう、其處迄の探訪行届りず、此妓  
 顔は少し長く、目少し大きい……がコリヤ鈴を張れの諺もある  
 から、これでヨシ、且那取りの風と、チト痲癩を起す癖あり  
 とか、當樓でも一番よく售るところでは、随分鼻下長先生をチ  
 ヨロまうすの伎倆ありと覺はたり。

○妓娼錦  
 寶勢樓  
 此妓顔はチト長方で、からに、脊はスラリツと高しです、君明晩  
 來る契約に違背しちや嫌だよ、杯と云つたり「マイデヤサイ、カ  
 ムエゲイン」杯と、やらうすところでの、チト勉強しているやう  
 にも見ゆるが、或は聞覺はか堂だか、容体のチトおもげなると  
 ころでは、堂やら官員三の權的らしい様よ見ゆると聞さし。

○妓藝梅吉  
 中檢番

或る新聞に梅吉は俳優某を大阪の何處やら迄追かけて、北陽  
 の妓はんど差合よなり、未は妹妬の角で突き合をやらかした  
 とは、誠に遠方の處誤苦勞千萬よ奉存と、書いてあつたが、此梅  
 吉のと、か知らん……世間には似た名もよくあるやつ、似たやう  
 ぢ人もよくあるやつ、だうら定めて此妓のとでないよ云ふと  
 は、万々承りませんから、か受合は致し兼ますが、ハ姑らく願

客諸君に譲るとして、評者は是より此妓の容色なり、枝藝等をト云ふても未だ一度も拜見いたしたとはありませんが當時檢番で屈指の藝妓だと聞きましましたから、定めて何角に不足なき姐さんでしよう。

○妓娼種龍

真田樓

評 容色は可なり、當樓でも一寸售る顔だが兎角男は狂ふ癖があるとは、誠に悪いとです、何時ぞや夜中過ぎに……而かも人の寝静まりたる折を考へて彼の浦里の流れの水を汲まんとてあやまつて井戸へ、陥つたッーだが危険うら能く氣をお付なんしよ。

○妓藝市鶴

中檢番

之れも中檢ではよく售る部、容色は余り上等にもあらず、ト云ふて又余り下等でもあし先づ中等あらば上部よりは十分座れ

評

るでしようか、客待遇は可なり、藝も亦可なり、併し世上の取沙汰最一増宜敷あい、イヤ市鶴のん誰れやらに舞の手を覺ようとおもつてか、大分金を入れやはッたどろ何とか漢とか言つて居るが、中にも八〇トカハ其尤もいちづるしきものなりと、ソイですかいな……

○妓娼玉野

新川柳原樓

新川娼妓中にて、ヤンチャものを番付にすれば、此妓こそ東の大關も位する姐さんとは或る角力すきより承まはつたるところなり、余り清くもあらぬ勤の身、夜毎又うゝる新枕かはす内にも又好きな男もあらふに左はなくて、イヤハヤとんでもねへお行義よし、同じ廓内に女同志互にうはるなうはらじと末は九十九の友白髪トでも申すやうな筋があつて中々樓主の折檻も聞き入れぬよし、無益お世話だが困つた姉さんでい

あるわい。

○藝福助

中檢番

最早容姿を以て售ると云ふ年でもありませんが顔は丸顔で  
ポツテリとした方藝は申分なく殊に義太夫に達しをるよ  
し、性質のチトヤケの方あれども、待遇に至つては決してあつ  
かましき様な風なし。

○藝若八木

愉快樓

夜目遠目笠の内と、いろはたどへの古い文句、此妓顔質よく  
脊も通常あれば、格子に立つて之れを見ると、實に別嬪として  
流石當樓のおいらんかと思はれ、恍惚として登る客も澤山だ  
が……怪しき夢もいつか覺め、翌る朝になつて……大方おしるい  
の脱げたるどころを見ると……優しい柚顔、汗染……蚊しなす……  
仁者……と云ふので、お客はコイツ買かぶつたと思ふとも時々

評

判

○藝若里

中檢番

あるッ！ですが、何しる客に對しては誠に丁寧……假令ひ一  
見の客たりとも、丁寧な待遇すものだから、其親切と丁寧とを  
以て十分其穴をうめるとが出来まだ其過りが澤山出るッ！  
です、感心……顔で售らすよ心で售るとは誠に感心  
技藝と容色は世間並よしして其温厚しい風を見ると素人婦女  
の様に思はるれど、或は諺の子ソの事起しならんか、兎も角酒  
を嗜むの癖あり、従つて飲んだ酒なら酔はずばなるまいと、平  
右衛門の口調を借用して時々地質を露はす癖もありとか可  
成は地質の知れぬ方がお徳用だろウト考へますが如何おも  
んでしよう……ネー若里さん。

○娼花紫

色葉樓

雲州生れよしして、曾て大坂に居りたることあるや、聞けり、容

あるわい。

○藝福助

中檢番

最早容姿を以て傳ると云ふ年でもありませんが、顔は丸顔で  
ポツテリとした方、藝は申分なく殊に義太夫に達しをるよ  
し、性質ハチトヤケの方あれども、待遇に至つては決してあつ  
かましき様な風なし。

○藝若八木

愉快樓

夜目遠目笠の内と、いろはたどへの古い文句、此妓顔質よく  
脊も通常あれば、格子に立つて之れを見ると、實は別嬪として  
流石當樓のいらんかと思はれ、恍惚として登る客も澤山だ  
が……怪しき夢もいつか覺め、翌る朝になつて……大方おしるい  
の脱げたるどころを見るとき……優しい袖顔、汗樂……蚊しなす……  
仁者……と云ふので、お客はコイツ買かぶつたと思ふとも時々

評

判

あるッ！ですが、何しろ客に對しては誠に丁寧……假令ひ一  
見の客たりども、丁寧な待遇すものだから、其親切と丁寧とを  
以て十分其穴をうめるとが出来まだ其過りが澤山出るッ！  
です、感心……顔で傳らすよ心で傳るとは誠に感心

○藝若里

中檢番

技藝と容色は世間並よして其温厚しい風を見ると素人婦女  
の様に思はるれど、或は諺の子ソの事起しならんか、兎も角酒  
を嗜むの癖あり、従つて飲んだ酒なら酔はずばなるまいと、平  
右衛門の口調を借用して時々地質を露す癖もありとか可  
成は地質の知れぬ方がお徳用だるうト考へますが如何かも  
んでしよう……ネー、若里さん。

○娼花紫

色葉樓

雲州生れよして、暫て大坂に居りたることあるや、聞けり容

判

評

姿至極艶なりとは申されぬが先づく艶位なり、体大きく従つて智慧蠢も大きい衆客を待遇すると妙なり殊に法律家にはよく好かれる好かれるから……よく好いて法律家の法字を聞いても待遇が格別に違ふと云ふ風説なり。

○藝鶴子

西檢番

是亦一ト通りの藝妓よ過ぎずと雖ども少しくお多辨の風を免かれず其おしやべりの口元で都々一や端唄をやらかすから余程軽く……スーッとして……妙なるところあり特に薩摩琴と云へば其温奥を極め居れば如何程な達者にも容易に打勝つ伎倆ありとの評判よし。

○娼初菊

八幡樓

先づ當樓でのたても顔長く鼻高く何處となく涼乎としたる風あり客を待遇するに偏頗なく能く機嫌を取るとの風説

○藝高助

中檢番

脊高くしてボテく肥へたる方容色は中等の中部性質は實着なる風座持は上手上手藝も十人並の内よ義太夫は殊よ上手上手とて評判悪からず。

○娼小浪

松浦樓

眼元冷しく鼻高く皮膚の色は白く奇麗なり性質は面白く洒落るほうにして客を待遇すると尤も上手なり此妓は他の娼妓の如くベチャく主義とハコロリと變つて別よお追従がましいと言はすして客を喜ばすといふ風なりとか兎に角一ト風かはつた姐さんです。

○娼美柳

青柳樓

元と大坂に生れ此樓に来てから二年余り容貌は一才十人並齒の出喰ひで一入愛嬌を添へて居るとはお恍惚なんしたか

方の評判客を待遇するとは誠其妙を得殊に俳優の話をする

○妓藝綱吉

中檢番

モ一か年が年だから容貌の良否より藝が肝要此妓元と柳原にて稼ぎ居たりしが義太夫は余程其妙を得たるよし客の待遇に至つてもか年柄だけに座待なごうまいことやる。殊に因州節は此妓のかくし藝なり。

○妓媚仙吉

新川小西樓

コレはこれ東の大關玉野に對する...西方の關取容色は一才十人並さうなが同樓よてもズーツの上席にも得据らぬくせに氣儘とはサテくふてい姐かち抑も仙吉が籍を掲げたるは去年の九月なるが以後一周間斗りは機嫌よく親方へ奉公せしも其余今日に至る...凡そ一ケ年と云ふものは九ツ切

評

り病院住ひと云ふても、余り言ひ過ぎもあらざるやに聞けり、名斗り何もせん吉でも、女同志...アタ厭らしい...何やらを何する吉じや、サツ樓主さんも迷惑でしよう、未だく委しきとはたんど知つて居るが、大まけに、負けて茲はかこん...其かはりにチトおたしなみなさいヨ。

○妓藝まん

兵庫柳檢

判

技藝は余り感心せぬが、滑稽道化に於ては、實に稱讚の至りに堪へずです、能く酒を嗜み、管を巻くは感心せぬが、起つてチャリ舞を奏し、座客を浮かす点に於ては、實に稱讚の至り堪へずです、まんや容姿は自然に滑稽に適したる(トテ決して屁茶じやげへせんせも品格の頗る高きに於ては實に他をして美然たらしむです、流石か年柄だけ真味のお客を捕るとの上手あるに至つては、實に他をして美然たらしむです、だうら評者



方の評判客を待遇するとは誠ニ其妙を得殊に俳優の話しを  
すると咽喉をグウグウならして喜ぶと云ふが堂だう。

○妓藝綱吉

中檢番

モ一お年がお年だから容貌の良否より藝が肝要此妓元と柳  
原にて縁ぎ居たりしが義太夫は余程其妙を得たるよし客の  
待遇に至つてもお年柄だけに座待なとうまいことやる。殊  
因州節は此妓のかくし藝なり。

○妓媚仙吉

新川小西樓

コレはこれ東の大關玉野に對する...西方の關取容色は一才  
十人並さうなが、同樓よてもズーツの上席にも得据らぬく  
せに氣儘とはサテくふてい姐か抑も仙吉が籍を掲げた  
るは去年の九月なるが以後一週間斗りは機嫌よく親方へ奉  
公せしも其余今日に至る...んそ一ケ年と云ふものは九ツ切

評

り病院住ひと云ふても、余り言ひ過ぎよもあらざるやに聞け  
り、名斗り何もせん吉でも、女同志...ア、厭らしい...何やらを  
何する吉じゃ、サツ樓主さんも迷惑でしよう、未だく委し  
きとはたんと知つて居るが、大まけに、負けて茲よはかゝん...

○妓藝まん

兵庫柳檢

判

技藝は余り感心せぬが、滑稽道化に於ては、實ニ稱讚の至りに  
堪へずです、能く酒を嗜み、管を巻くは感心せぬが、起つてチャ  
リ舞を奏し、座客を浮かす点に於ては、實に稱讚の至り堪へ  
ずです、まんや容姿は自然に滑稽に適したる(トテ決して屁茶  
じやげへせんせ)も品格の頗る高きに於ては實ニ他をして美  
然たらしむです、流石お年柄だけ眞味のお客を捕るとの上  
手あるよ至つては、實に他をして美然たらしむです、だうら評者

の如き野暮の青二才が、どんなに言つても、矢張り金銭たらし  
ひです。

○妓娼一龍 福原三十軒 金勢樓

脊は高く體瘦せたる方、目ハチト奥の方よあれども、顔の格好  
よるし、客と待遇すると上手にきて、殊にお寢間の上手あるい  
ろく、と手をかへ足をかへ、五らんに入れるよし、或る好敷奇  
なる人の話し、何しる當時お職にして客受もまづく。

○妓藝柳吉 福原仲檢番

もはや老妓の部よ這入りたれば、容姿や色氣の有るあしは申  
さいでもものと、此妓中々諸藝よ達して何一トつ知らんと云ふ  
となし、ダカラもう書くとなし

○妓娼小萩 澤山樓

營業から以來、彼是れ二年殊に岡山よての修業もあるよ、始終

判 評  
敷居近座を占むるとは、ハテ……段々調べて見ると口と目と  
何やらは普通より大きけれ外よ是と云ふて欠点もなく、お  
客の待遇なども余程骨ををつて居れども、たゞ床入の前よ、親  
子井なれば三ツ四ツ……卷酢なれば先づ七八本、喰はねば寝ら  
れぬ癖が第一の灸所なりと云ふが、テモ妙な癖……願くば其よ  
く喰ふ癖を客の方にかへてもらいたいもの。

○妓娼壽 福原三十軒 山田席

判 評  
これは山田の店にていつも二三枚目よは座つてをる娼妓な  
れども、客付のよきとは實に妙です、之れ待遇の上手なる譯な  
る顔丸くして眉くろくと秀でたるやさしきたらなり  
此妓大工の話しをするよ、誠ようれしが、るッ一あが、如何いふ  
譯かナ。

○妓藝小三 兵庫淀檢

此妓は何處やらが田舎くさい風ありと評判するものもあるよしなるが、小三よどりての誠無念なる感情をするあらんとハチト評者が此妓思ひのおせじすぎりは存せぬが、琴をひきよせ、コロリン、シャンと弾きかくれば、何となく奥ゆかしく見ゆれば、これよて田舎くさい風もつぐなふとを得べし。小三の父兄なき獨身ものあれば、戀婚をひかへんと財を蓄へ、其の用意をのみなしいると云ふ、世の金五郎たらんと欲する君達早く候補の申込をなし玉へ。

判 評

○妓媚初雪

寶勢樓

マ一こころは一寸付の上等部、顔の丸形で大坂生れ、外部はまといにおとなしう見ゆれども、チト生意氣の風あり客を取るとにいたつては、なか／＼か上手……人氣もあまり悪からず。

○妓蕙市樂

中檢番

何でもよし／＼と云ふ様な、順才あるお客に熱心し、播州ういわいまで行つて、顔をわううして歸つたといふうわさを聞くど、まもなく中檢ふ此妓を見る……去る七月中はまた西檢において見うけしに……今や中檢に見る……如何なる故にかはりしや、其ゆへを知るによしあしといへども、おそらくは己れを恥ぢてのゆゑなるべきう、此妓容姿技藝は十人なみあれば、最少し鼻毛をかぞへたり、うちよてんにする工夫を、稽古したらんには、天晴れ一妓當舞の妓となり、今日の汚名をそぐこと間もあるまじ、勉強し玉へ、ヤヨ市樂姐。

○妓媚壽

山海樓

人は必ずしも面想によつて其人の性質のわかる者よはあらす(併)ま八卦見はいざ知らず、此妓の如き、まづ容貌からもうせば、顔は少し長き方、口小さき方、目は細き方、鼻は高き方と申す

人相がきだから別に見つともなき顔には萬々これなくだが一寸にがみのはしつたる相をそあへたるやに見受らるが、しかし、實際はなかくにがみのにの字もなく、かへつて十分の甘味ありと或る人はいへり。

○妓婦久方

福原三十軒 柴田席

評 容貌は十一人なみぐらいなるが、其横顔を見るときは、古今とつば、ちんむる、いといふはどよもないが、真向よりはよはどよく見ぬ、寐のお伽はなうくの老練にて少し義狭心に富みどきく居残り客を助け出すとありと、それにてう願る客うけはよるし。

○藝仲の助

中換番

評 容貌もうなりまわくぐらいお嬢さんの様でトント藝妓のやうに思はれぬとの風説を聞きしが、若しソ一ならば夫れで

判 別は藝妓の名が廢たる、客の傍に座つて……隣りの猫をうりて来たやうにして、いるばかりが藝妓じゃあるまい、チトおかんがへあされて、せめては少々お世事だけでも云ふやうにあさつて、如何でげす……トハ又いらぬ誤世話様……

○妓婦梅ヶ枝

成田樓

判 別にこうと云ふて稱むる容色に、いあらざれども氣質のおとなしいところが、先づ此妓の命でしやう。おぼこひよう。あとを言ふて居て、お容を蕩らうすとの、余程妙に……上手なところでの、定めてお寢間のお伽も妙よ……上手あるのでしようか。

○藝若富

兵庫柳換

判 造物者は何故よかくの如き妙な洒落をなすや、顔の女よして其膽は男トこう書き出せばあまり仰山たらまつくつて、何だの不具者のやうに聞ゆるが、なかく左様な譯にあらず、たい僅

かに其氣象の確乎として、男子も及ばぬと云ふだけですが、ソ  
 ナとは兎に角、身体ハホツソリとして鼻と共に高く、舞の手  
 至つては、殊に天狗の鼻ソツチ退け、是れは或る俳優の仕込  
 んでもらひしかかげなりと云ふものもあり如何にや、併し座  
 敷の執なしは、少し陰氣なりと、如何に氣質が男だつて女の面  
 をかぶつてゐりや……イ、エイナ藝妓を商賣にしてゐりや、今  
 一トきは陽氣にしやはつた方が、お徳でいおまへんか。

○妓娼 紫 勢陽樓

當樓よて當時のお職容色ハ上等あれども色の黒きところが  
 一トつの瑕瑾性質はツツパリとして客の待遇よろしく、うけ  
 もなかよくよし、此妓普通教育を受けをるといへど、評者はい  
 また其伎倆をはいけんしたるとなれば、何れどもれ請合は  
 しがたし。

評

判

○妓藝 玉 吉

何程浮意々々した浮氣商賣じやうらつて、變るが早いカオテ  
 、エテン、粘の子分の戲の道ぎれど、此方からやるのか、彼方う  
 らか、ソソナ媒介役まではしませんから、如何ですか判りませ  
 んが、容姿はたしかに十人なみと、で、客の待遇は至つてれ  
 上手大ていの客ならば満足さす……する……せんやうになるこ  
 の三つの順番がはやう來すぎるから、トント半年と斷續いた  
 ら客はないといふ噂です……とは又如何いふ譯で……サア其譯  
 はな、わんまり無茶な話したから跡が、出ませんよ……ト近所の  
 床屋で話してゐたのと、或新聞の雑報どが、ピツシリ出合つた  
 のだが、夫れともうと、知らん……トおたしをみなはい。

○妓娼 九 重

當樓に勤めてから、今日迄大方五年よあるが、其内去年の春と

か、タツターべん、ズーッと席がさがつただけで、何時もお職う  
悪うて二番目ぐらゐ、併し揚巻がきてからはチト……此妓眉は  
黒々として九顔のホツァリ……とまでは行かぬが、ホツァリと  
らいの愛嬌もの……人氣よし。

○妓娼花扇

真田樓

評

顔は上等にして批難すべき点あり、此妓大坂よて稼ぎをりま  
が、本年六月頃やうやく當地より來り、當樓に顔出せり、流石は新  
町で苦勞して來ただけあつて、來ると間もなく席の進みたる  
は全く從來の熟練と、此妓特有のお手管とによるか、いましば  
らく立たば、ドンな娼妓になるかも知れないとの風説、花扇さ  
ん喜び玉へ、ソシテ評者はまことにたいらんが、親に孝行をこつ  
くさると承まはつたが、どうか其心をいつくまでも忘れぬ  
やう願ひたいと思つてゐます、ソラ營業も肝心ですから、夫

判

れをみるそかよしちや、いさまへんが、その營業を大事よかも  
ふのと、一時におやくさんのとも……子へ花扇さん。

○藝若米

福原仲檢番

容色はあまり譽められぬが、ヤケな質で色氣なし、藝の何なり  
とも十分に之ありい、だシテなか／＼學者だそうですが、評者  
はまだお目見せしませんから、色氣があるやらないやら、學問  
があるやらないやら、トント相わからずいへば、何方とも團扇  
は揚げがたくい、早々か……

○藝朝龍

中檢番

座鋪を勤めるとが少し上手なるゆゑか、客を特別に待遇する  
ゆゑ……何か知らんが、トこう書出しててもわかるまいが、藝道  
の最一きは感心せぬのに、随分花を售るとは……不思議なもの  
だナア……とコハ或ともだちが評者に向つての話、ソコで人

判 評

相は如何だへと問へば、圓顔でチト肥へたる方、皮膚の色はあ  
さ黒い……近頃黄八丈のせうかしらん……と答へました、が夫れ  
からは聞かず……ダカラおしまい。

○妓娼小久

愉快樓

評 容貌は十人なみの女よりは、少く上部に位するでアロウ。ソ  
ーして鼻は吾が名とソーして教育……ソレハ相當の教育ある  
と云ふ心ととも、天狗よりも猶高くあるでアロウ。頭は當世  
の束髪を結ひし……小久彼女自身は、或る西洋風とソーして  
生意氣を氣せるでアロウところの……當世の束髪を結ひし、  
ツト(オット)しうしあがら小久を呼び、ソーして一夜の快樂を  
取りしところの客は皆言ひし、小久の髪の毛……ソレハ彼女の  
頭に生へるところの髪の毛が薄少くあるでアロウと假定す  
ど。私しは此話を聞きし、ソーして彼女と對まては、怨とソーし

判

評 自惚の何にもを持たぬ、夫れ故に小久彼女自身が……今此話  
せしところの話のやうに、意味せぬでアロウ。うを見いだすべ  
く甚だ困難なる仕事である、夫れ故に評判のまゝを書き、ソ  
して噂の良し否の、讀者諸君に之れをまかさんト私しは左様  
考へる杯と浮れてゐる哩……生意氣に。

○妓藝島吉

兵庫淀檢

判 ヤケ藝妓で其名も高き島吉の、客の好みに従がふて、何でもか  
でもおいでなはい、ソレ立て……踊れ……ソレ着物も取て裸体よ  
なれ……サアサ誰れなどかいでなはい、尻振一しよよねどりま  
しよ、序に湯巻もどつてくれ……オット來たりとまつばだか……  
サアしエ、浮いた浮いた……エと客と共にねまはり、何やらを  
せる位ひは何とも思はざる、大ヤケ妓、藝食ふ虫も好きく  
とて、コウ安ッぱく見せるの(尤も外面だけよめせよ)にも底魂

と云ふ意氣筋があるで見ゆ、當時はかなか魂が出来てゐる  
ソウだから、此機をはづさず、招いて、月が……位を所望しては如  
何、ボテレツをホリ出しての踊りも實際ですから、定めて妙味  
あらんと存じます、しかま五承知の如く塊りはいつ迄も有ら  
しまへんせ……宜しいか……一寸念の爲めに……冀念に……

○妓藝福六

中檢番

判

容貌は余まり譽められた方でなし、ソークと云ふて藝が頭抜  
て達者と云ふでもなし……ヘラヘラ……ペラペラ……ペーサー  
つ持て来なさい……ヘラヘラのヘー……の一天張だと云ふ話し、ホ  
ントにソーなら可笑しい子……ヘラヘラノヘー。

○妓藝糸松

福原仲檢番

立華な腕前を持ちながら、少しか澤山う……何方う知らんが……  
聲がよくないので、チト引き立んソーなり、容色も十人なみ下

つても上る様などは、健かよないのと、併し座敷の取り扱ひ  
は極々の至極か上手と聞きましたか……虚そう……實際う呼んで  
見たまへ。

○妓藝力彌

兵庫柳檢番

評

容姿こそ悪るけれ、義太夫の力彌と来て、知る人ぞ知でなし  
に、ホントによく人の知るところです、総体花柳仲間には或は  
指をさるものもあり、或ハ髪をさるものもあるが、彼等は皆心  
中だてどか何とか、嫌らし筋でやるとされども、大事な……殊に  
此商賣柄大切なる黒髪を惜し氣もなくアツスリ根元から、  
もきつて、衆客を仰天させると云ふやうな風のあるところは  
實に感心よ堪たりと、或友人の話……力彌さんのうちはモ一こ  
うかへ、わしや恥うしい……といひま小浜の情人よりは、またま  
だズーッと可愛らしい顔です……ドンナに……顔中一ぱい笑盛



だらけてすもの……但し惚れた目から見れば……

○妓澤山

澤山樓

澤山樓の御大将澤山とは妾がとなり、いつぞや妾を評してくれ  
 たるとありし、其厚意は誠難有次第なれども、其事實に相違  
 したる点あるを以て、屢々客よ翻られ、聊か腹立たしき廉無き  
 にしも非らず、然るに今又汝野暮不通なる癖に妾を評せんと  
 は片腹痛き心地す、妾や容姿最優等に位するよ非ずといへど  
 も、一度び當樓に轉籍するや、日を経ずお職の地位よ登り、今猶  
 席を他譲らざる所以のものは他なし、妾が多年の経験と妾  
 が特有の才智を以て、衆客を待遇するの秘訣よ長じたればな  
 り、何ぞ汝等如き不眠者の評を以て、名を博せんと欲するなら  
 んや……オ、こわ……オ、こわ……

藝娼妓評判畢

藝娼妓細見

●神戸市中檢番藝妓之部

(九月未調)

見	細
若金 尾崎よし 十八年五月	若玉 高橋たま 十六年六月
若房 鮎谷ふさ 十一年十一月	若鶴 中村小三 十六年九月
若里 山口さと 廿三年六月	若子 竹内よ志 廿二年六月
小歌 岡本たま 卅一年二月	小鶴 千葉たつ 十五年七月
照香 金井もと 十九年九月	照子 本田なみ 十七年八月
君子 近江ひさ 廿一年六月	一樂 近江ひさ 廿一年六月
長吉 加藤うの 廿二年七月	玉の助 西岡いし 十五年九月
梅吉 矢島むめ 廿五年十一月	梅の助 北山りき 廿三年六月
光龍 山本さん 廿一年六月	光龍 藤谷まさ 十四年五月
朝香 玉置こと 廿二年七月	朝龍 中野ます 廿三年一月
若吉 野間福得 十八年八月	若吉 野間福得 十八年八月
福助 鹿島すま 三十年四月	福助 鹿島すま 三十年四月
小延 明石よね 廿二年八月	小延 明石よね 廿二年八月
市の助 柴田すい 廿四年七月	やっ子 岡島よね 十五年六月
市鶴 山井ます 廿二年八月	梅の助 直川ふさ 廿六年六月
三木松 三木いと 廿七年三月	三木松 三木いと 廿七年三月
小ふさ 神尾さだ 十六年八月	小ふさ 神尾さだ 十六年八月
久尾 布谷すゑ 十八年七月	久尾 布谷すゑ 十八年七月
成駒 川崎いと 十八年八月	成駒 川崎いと 十八年八月
小鈴 岡田ゑん 十七年九月	小鈴 岡田ゑん 十七年九月
若龍 吉村むめ 十八年十一月	若龍 吉村むめ 十八年十一月
小ぬい 山本さく 廿二年一月	小ぬい 山本さく 廿二年一月

見 細

若八重	勇子	愛の助	若六	小歌津	今吉	小金	辻幸	光子	梶吉	仲の助	とめ	梅香
三木れん	近江ゆき	川崎みさ	藤井こま	西村はな	佐野いそ	多田たね	金山なを	小林さと	小泉ます	高濱みつ	山口とめ	福井たい
六三年	三七年	五七年	十三年	八五年	九五年	一七年	六五年	十九年	二二年	三五年	一五年	五九年
吉彌	みね	長	若長	小その	春吉	若榮	鶴勇	鶴榮	小八重	小芝	梅龍	新駒
喜多とめ	矢島みね	平野るい	生島さき	森本さく	伊藤みさ	春野もと	寺井せい	高島ゆき	田原なつ	荒木ふく	矢島つや	松田すゑ
一六年	二五年	十一年	七四年	七二年	一二年	廿年	八七年	二八年	七一年	二四年	十五	九五年
よね	若春	作吉	小奴	小勇	若糸	松龍	ゑん	君龍	小とく	若富	若力	愛子
高橋よね	眞田らく	三浦ちよ	立花りう	岩橋きよ	上杉まさ	山口しけ	川口なみ	奥田たつ	大川ひさ	柳谷とめ	三木よね	山田とし
一七年	十六年	十九年	十八年	四四年	廿五年	十九年	十九年	七一年	二一年	四七年	廿一年	十四年

(六十七)

高助	小三	仙勝	綱吉	秀吉	助八	幸勇	玉造	若朝	歌吉	小らく	小長
三木たか	井上かめ	永井たま	小山つね	坂本ひで	柴田とめ	入山たま	見崎ます	三浦たか	竹内きわ	玉村たね	金子さく
九十年	二一年	三五年	八五年	七五年	四一年	四一年	六六年	廿年	八八年	三七年	十八年
朝吉	みや	八重松	作鶴	しづ	小はん	いと	花玉	福光	千代	金の助	若勢
川崎こま	林たか	三木みね	小西まさ	清水いく	佐藤とよ	吉田いち	北垣きみ	大塚しな	家應ちよ	中井あつ	本間きみ
廿一年	五五年	五七年	三九年	廿三年	九二年	七四年	十一年	三二年	十八年	廿三年	十九年
久松	若徳	柳光	八重鶴	清鶴	君勇	榮吉	か	千玉	若梅	愛治	愛梅
山上たつ	武田くし	荒牧たい	春野みね	田中つる	吉村よま	吉田うの	山本りし	萩原もと	熊本つや	春井うの	奈良らく
十九年	廿三年	十九年	十五年	九七年	五一年	二二年	八六年	廿五年	廿五年	六三年	七三年

(六十六)

見		細	
久丸	佐藤ならゑ	久丸	佐藤ならゑ
小萬	木村たね	小萬	木村たね
駒の助	服部やく	駒の助	服部やく
小さと	吉岡うつ	小さと	吉岡うつ
仲助	本田なか	仲助	本田なか
愛香	橋本ひて	愛香	橋本ひて
福榮	永井こま	福榮	永井こま
若艶	須藤ひて	若艶	須藤ひて
小てい	木内うの	小てい	木内うの
小龍	伊藤さき	小龍	伊藤さき
徳八	長谷川菊	徳八	長谷川菊
益榮	津田たね	益榮	津田たね
若鶴	矢坂はな	若鶴	矢坂はな
りう	淺野りう	りう	淺野りう
なべ	渡邊らく	なべ	渡邊らく
花龍	近江しろ	花龍	近江しろ
きぬ丸	布谷きぬ	きぬ丸	布谷きぬ
壽の助	山田ぢう	壽の助	山田ぢう
小品	前田しち	小品	前田しち
品玉	高橋さと	品玉	高橋さと
朝子	和田くら	朝子	和田くら
小菊	佐々木福	小菊	佐々木福
八重龍	田中らく	八重龍	田中らく
小市	田島くま	小市	田島くま
高子	三宅ます	高子	三宅ます
市丸	岩根とさ	市丸	岩根とさ
宮助	田中小さく	宮助	田中小さく
春松	佐々木里	春松	佐々木里
小み	齊藤つる	小み	齊藤つる
さく	安田せい	さく	安田せい
たい	松井たい	たい	松井たい
力龍	宗國まら	力龍	宗國まら
友吉	森本こま	友吉	森本こま
久の助	若柳さく	久の助	若柳さく
福鶴	森井さき	福鶴	森井さき
久龍	島田ます	久龍	島田ます
玉尾	吉村さみ	玉尾	吉村さみ
かね吉	茨木よね	かね吉	茨木よね
鈴吉	松見さん	鈴吉	松見さん

(六十八)

見		細	
小福	角高ひさ	小福	角高ひさ
徳榮	田付はな	徳榮	田付はな
いち	高松はま	いち	高松はま
せん	後藤さみ	せん	後藤さみ
三子	龜井はつ	三子	龜井はつ
勇	藤橋ため	勇	藤橋ため
若吉	山口すゑ	若吉	山口すゑ
千代松	南部つる	千代松	南部つる
三光	内山その	三光	内山その
町子	今井ひさ	町子	今井ひさ
米八	前田ひで	米八	前田ひで
品吉	吉田たけ	品吉	吉田たけ
柳勝	奥田かつ	柳勝	奥田かつ
小傳	有本さか	小傳	有本さか
若品	梶岡うの	若品	梶岡うの
千代香	尾上加つ	千代香	尾上加つ
玉助	加藤すみ	玉助	加藤すみ
駒吉	原さみ	駒吉	原さみ
小三	原こう	小三	原こう
玉鶴	西片ゆう	玉鶴	西片ゆう
よね	久保よね	よね	久保よね
先玉	青山ふさ	先玉	青山ふさ
艶子	森川みな	艶子	森川みな
春の助	油谷さく	春の助	油谷さく
ト一	日井さく	ト一	日井さく
たか	高松たう	たか	高松たう
小種	小西たね	小種	小西たね
若千代	鎌田さみ	若千代	鎌田さみ
秀吉	西辻ひで	秀吉	西辻ひで
照歌	辻やゑ	照歌	辻やゑ
若北	鈴木きた	若北	鈴木きた
小作	藤岡さく	小作	藤岡さく

●柳原淀檢番藝妓之部

(同前)

(六十九)

成吉	歌光	小六	若駒	小しげ	あ・い
金藤ひで	辻さく	今井つや	川村こま	三浦ひさ	草井あい
廿三年五月	廿五年五月	廿九年二月	廿三年二月	廿八年二月	廿二年九月
若久	てつ	若國	駒龍	花子	駒八
兵戸うさ	藤井つる	池田すて	加藤はる	西川いを	安田すみ
十六年六月	廿五年九月	十六年五月	十五年十月	十六年六月	十六年五月
鳥吉	とり	芳吉	若照	玉龍	
松林たみ	海老谷とり	森村こま	井上とく	川上つる	
廿一年二月	廿五年八月	廿二年三月	十五年十月	十七年四月	

●神戸西檢番藝妓之部

(年齢の第貳編のかたのしみ)

若玉	小松	豊香	小鶴	秀龍
鈴木さと	金谷さく	福岡すみ	橋本ぬい	筒井よね
秀路	玉路	あい	鶴子	豊菊
齊藤てつ	井淵よし	永井樽榮	松村ふく	西脇うた
さみ	勢子	若徳	玉力	琴榮
桂たか	辻ゆき	藤原さく	今井こう	永井りう
小米	玉龍	愛松	琴路	琴松
安倉よね	牧谷たみ	藤田藤生	二山川勝	間野こと

若勢 吉岡いち

◎福原仲檢番藝妓之部

(同前)

留吉	若子	三八	豊松	鳥吉	若し	駒吉	柳吉	豊丸
松本さぬ	渡邊はる	駒田つる	松本たう	金川さく	篠田かつ	倉城たん	井上たみ	柳澤てつ
若蝶	先米	八重吉	小千	玉吉	若福	松助	小六	小久
堀口やゑ	松下こと	宮田つね	佐野やす	中新さわ	渡邊はる	清水かめ	江川ひで	池上小梅
一助	小吉	福龍	八助	兼吉	小龍	伊勢吉	糸松	せい
梅津ゑい	岡野うめ	安永うた	松井はる	富田ゑい	榮あさ	前田ゆき	三原ぬい	大谷せい
小里	若米	榊吉	長吉	八丸	小秀	吉松	小延	
牧野さく	佐野ひさ	森本せい	今宮つる	山田まさ	佐野小秀	野崎つる	清水こう	

同舞妓之部

留丸 柴田はる 小蝶 小西とよ 留子 櫻井すま 小菊 池上ふさ  
 小米 松下ぬい 常子 倉城つね 圓子 松下ゑん

●柳原柳檢番藝妓之部

(同前)

見	細
いと	入江ふく
加津	奈須うつ
若富	飾摩とめ
小蝶	見玉まさ
小金	井上つる
ま	梅本ます
艶子	高木さく
愛子	藤澤しん
政吉	杵谷しげ
政子	播本つる
千代	眞野ふゆ
蝶吉	辻たか
若松	松安小虎
三吉	藤岡とめ
力彌	岩さみ
さみ	高瀬よしと
小福	藤井すゑ
小龍	清須はな
若豊	吉田てい
若福	福本小鶴
龍	坂井はる
愛吉	岡田たつ
若子	北村さく
玉吉	佐野龍
小力	三津うめ
小糸	森岡さぬ
若朝	寺崎とめ
蝶之助	大村菊次
玉子	加賀しげ
小玉	岡村いつを
若蝶	鳴尾すゑ
いせ	於勢ちく

●橋通(稻荷新地)娼妓之部

(九月末現在)

見	細
清鶴	丹羽 かん
若勢	駒井 せよ
卷江	前川 ます
常盤樓	全 六丁目五番屋敷
雛鶴	齊藤 かつ
染ノ江	森田 恵
壽	中井 すし
小浪	阪 まつ
榮樓	全 六丁目二番屋敷
雲井	津奈としよ
小浪	鳴神こなみ
丹羽てい	いろは 佐野 とら
福根	大前 よね
夕霧	富澤 ひさ
吉川彦兵衛	柏木 古川 小信
小榮	熊野 ゑい
小糸	渡邊 いと
小梅	角南 しも
緑	淺井 まさ
小雛	中村小きょう

廿一年	若勢	佐々木やを	廿二年	若種	川添	しま	廿六年
十月全	若	田中	三月全	菊	堀	さく	十八年
六月全	若	まつ	七月全	江	堀	さく	十八年
廿二年	九重	佐久良とめ	七月全	江	堀	さく	十八年
十月全	九重	七ヶ月					

○勢春樓 全 六丁目十六番屋敷 近藤清助

廿一年	若菊	森田	廿一年	若力	笠松うまゑ	十九年	
八月全	若	さく	四月全	若	勢	江川としる	廿一年
廿二年	小櫻	竹田としの	五月全	若	勢	江川としる	廿一年
五月全	小櫻	廿一年					

○成田樓 全 六丁目廿番屋敷 重岡すゑ

十九年	重岡	堂倉	十九年	若系	重岡	きよ	廿六年	
四月全	重岡	ふさ	七月全	立	花	坪内	ちよ	廿一年
十二月全	吾妻	小野	九月全	花	里	山本	初恵	十七年
十二月全	小萬	はま	七月全	花	里	山本	初恵	十七年
十二月全	若種	石井	七月全	花	里	山本	初恵	十七年
十二月全	若種	つね						

○豊月樓 全 六丁目十八番屋敷 寶谷らく

二十年	八重菊	大村	廿一年	三扇	中場	りう	十九年
十一月全	八重菊	とみ	七月全	三扇	中場	りう	十九年

細

見

二十一年	玉菊	角	廿一年	久方	橋本	ひさ	廿三年
八月全	玉菊	たう	十一月全	久方	橋本	ひさ	廿三年
十二月全	梅が枝	廣崎	十一月全	小櫻	高木	京	廿二年
十二月全	梅が枝	よう	十一月全	小櫻	高木	京	廿二年
十二月全	小種	遠藤	三月全	九重	山本	みつ	廿一年
三月全	小種	かめ	三月全	九重	山本	みつ	廿一年
十二月全	一力	富田	四月全	綾里	光岡	てる	十九年
十二月全	一力	まつ	四月全	綾里	光岡	てる	十九年
十一月全	瀬川	石川	七月全	三花	山口	さわ	廿二年
十一月全	瀬川	菊江	七月全	三花	山口	さわ	廿二年
十一月全	白系	木谷	五月全	千鳥	林	つる	廿二年
五月全	白系	たけ	五月全	千鳥	林	つる	廿二年
十二月全	久菊	橋本	十二月全	淺妻	岩井	かめ	十八年
十二月全	久菊	しず	十二月全	淺妻	岩井	かめ	十八年
十二月全	綾衣	尾崎	十一月全	東雲	難波	きぬ	廿六年
十二月全	綾衣	かく	十一月全	東雲	難波	きぬ	廿六年
十二月全	小種	岡前	四月全	皐月	北山	萩野	廿一年
十二月全	小種	たね	四月全	皐月	北山	萩野	廿一年
六月全	錦	高橋	六月全	皐月	北山	萩野	廿一年
六月全	錦	京	六月全	皐月	北山	萩野	廿一年

(全通六丁目三番屋敷松月樓全二十一番屋敷日新樓ハ此豊月樓ノ支店ナリ)

○万勝樓 全 六丁目十二番屋敷 櫻井時光

十八年	白糸	岡部	廿二年	小櫻	加部	りう	廿二年
八月全	白糸	あゝ	十二月全	小櫻	加部	りう	廿二年

十九年 小萬 大内 まつ 廿四年 十一月全 人元 檢野 しな 二十年  
 九月全 小萩 松田 鶴江 八ヶ月 十二月全 梅ヶ枝 佐竹 とも 廿五年  
 三月全 全 六丁目二十三番屋敷 小谷 まさき

○播州樓

二十二年 小春 大鹿 こま 二十年 十二月全 八重鶴 安井 やる 十八年  
 七月全 小市 古市 らく 十九年 十二月全 品子 小林 とせ 廿一年  
 十二月全 ちか 俵野 ちう 十六年 六月全

○松榮樓

二十一年 壽 草川 さと 廿五年 七月全 人元 玉井 たつ 廿二年  
 九月全 朝野 門脇 朝野 廿三年 五月全 朝香 山下 しう 十七年  
 十二月全 全 六丁目十三番屋敷 中里 ふさき

○新榮樓

十七年 勢川 長門 すゑ 廿九年 九月全 若人 谷本 さよ 廿二年  
 八月全 錦 竹本 とし 十八年 九月全 若石 足立 いし 十九年  
 六月全 梅香 佐藤 さわ 十八年 五月全 菊の 松岡 さく 十八年  
 四月全 全 六丁目十九番屋敷 増谷 せつ

細

○一 樓 全 六丁目十四番屋敷 竹内 しげ  
 二十年 琴浦 三木 九か 廿四年 二月全 若江 中道 ふゆ 十九年  
 十月全 松ヶ枝 釣本 く の 廿一年 七月全 千代香 大久保ちよ 廿四年  
 五月全 高砂 榊井 とも 廿四年 七月全

○浪花樓

二十年 菊江 阿部 つね 十九年 二月全 若浦 荒木 まつ 十九年  
 十二月全 立花 中谷 まつ 廿三年 二月全 小玉 井上 ぬい 十九年  
 九月全 操 白石 く に 二十年 十月全 小雛 巽 かつ 十九年  
 六月全 全 六丁目十七番屋敷 竹内 まづ

見

○玉藏樓

十九年 色橋 小西 なる 廿四年 四月全 初菊 西島 はせ 廿五年  
 八月全 花ノ江 西口 さみ 廿六年 四月全 福松 黒川 よし 廿一年  
 六月全 若葉 根古 きみ 十七年 十月全 此糸 井村 こう 廿一年  
 七月全 全 六丁目二十五番屋敷 大橋 ふと

○近江樓

二十二年 此糸 米坂 こう 二十年  
 三月全 奈良江 桂 けん 十一月  
 二十三年 菅原 ちよ

○都 樓 全 六丁目七番屋敷

二十一年 小兼 服部すゝを 廿五年  
 一月全 若葉 新まさる 廿一年  
 二十二年 芳江 金丸 よま 廿一年  
 十二月全 浦野 い

○浦島樓 全 六丁目三十八番屋敷

二十二年 妻菊 坂野 小辨 二十年  
 七月全 松ヶ枝 高下 まつ 二十年  
 二十三年 榮鶴 岡田 ゑい 廿五年  
 二月全 安福 泰吉

○繁榮樓 全 六丁目四十一番屋敷

二十三年 錦 田中 ひめ 廿六年  
 六月全 鶴子 山下 とよ 二十年  
 二十三年 久菊 高木 よつ 十七年  
 七月全 末岡 志水 りせ 廿三年  
 九月全

●兵庫新川娼妓之部 (全前)

○宮本樓 今出在家町三百七十一番屋敷 宮本 うの

十九年 七月掲籍 小芳 田村小よし 廿一年  
 二十年 十二月全 米吉 上田 よね 廿二年  
 二十一年 七月全 歌吉 川邊 たつ 廿八年  
 二十二年 五月全 小福 北村 なか 二十年  
 二十三年 九月全 歌鶴 北村 しま 二十年  
 七月全 十九八 杉野 とみ 廿一年

二十一年 玉章 菅野九つよ 廿三年  
 四月全 若種 堤 ふゆ 廿二年  
 二十二年 三月全 錦子 宮原 やつ 廿四年  
 二十三年 九月全 錦 北尾 うつ 廿一年

○繁榮樓 全 三百六十八番屋敷 魚谷 吉平

二十一年 十一月全 若種 小林小みつ 廿四年  
 二十二年 二月全 小住 中山 ゑの 十九年  
 二十三年 四月全 玉章 菅野九つよ 廿三年  
 二十一年 五月全 壽 松崎 きく 廿三年  
 二十二年 十月全 吾妻 森本 はま 十八年  
 二十三年 三月全 錦子 宮原 やつ 廿四年  
 二十二年 九月全 錦 北尾 うつ 廿一年





廿二年 若石 石田 さし 十八年  
 十一月全 直榮 三浦 ひさ 廿四年  
 廿三年 春吉 三木 はる 廿七年  
 六月全 寶榮樓 全 三百六十三番屋敷  
 二月全 保榮 佐渡 やす 十六年  
 峯吉 松本 みね 廿三年  
 三月全 安達せき

○寶榮樓  
 廿一年 小勢 笠井 ゆき 十九年  
 九月全 若美 胡尾 たけ 十九年  
 十二月全 全 三百七十四番屋敷  
 八月全 香花 松下 なか 二十年  
 小梅 樽井 たら 廿五年  
 山下 しも

○藤原樓  
 廿一年 若糸 伊田 ます 十九年  
 六月全 若種 辻本 とめ 廿二年  
 七月全 松梅 中垣 つゆ 廿一年  
 六月全 全 三百六十五番屋敷  
 七月全 福松 仲尾 ため 十七年  
 此糸 戸田 こう 十六年  
 三月全

○朝日樓  
 廿一年 松江 河本 まつ 十九年  
 一月全 錦 中西 ます 廿三年  
 七月全 全 三百六十五番屋敷  
 三月全 小菊 山内 とよ 二十年  
 六月全 藤田寅藏

○和田川樓  
 廿二年 朝妻 松原 とく 廿三年  
 六月全 若吉 若松 さく 廿一年  
 全 若君 新田 さだ 廿三年  
 十二月全 花糸 淺井 ます 十七年  
 全 鶴榮 平野 まい 廿七年  
 若力 西脇 むめ 廿一年  
 八月全 友江 泰 しか 廿一年  
 荒田 丑松

○千石樓  
 廿二年 幸吉 抽木 ちう 十八年  
 八月全 末松 西崎 する 二十年  
 十月全 絹榮 末友 きぬ 二十年  
 五月全 全 三百六十一番屋敷  
 三月全 福松 幸島 とく 十八年  
 小竹 細川 うね 十九年  
 千林 喜介

見  
 五月全 絹榮 末友 きぬ 二十年  
 三月全 末松 西崎 する 二十年  
 十月全 絹榮 末友 きぬ 二十年  
 八月全 幸吉 抽木 ちう 十八年  
 二月全 小竹 細川 うね 十九年

●福原娼妓之部 (掲籍年月日年齢等は第二編のねたのしみ)

○色葉樓 福原町三百三十二番屋敷 藤並政治

小櫻 信口 なく 小町 相馬 らく 若梅 岡本 ふで

白糸	原田はる	いろは	和泉きの	みどり	安田ため
明山	牧野みつ	立花	才田つる	花紫	山伯こと
紫	茨木いは	小雛	濱田つね	雛鶴	宮本たけ
東雲	大島はる	はつ	松本はつ	歌之介	三木たね
玉琴	水野せん	若葉	高木いま	錦糸	松間なをる
葛城	山田たき	花之助	森井ふさ	花鳥	勝矢さだ
○松浦樓		全 四百五十八番屋敷		松浦長兵衛	
梅ヶ枝	今井たき	かつ	渡邊かつ	立花	難波たつ
見 小浪	藤井さく	雛鶴	松本あい	鶴羽	齊藤つや
重岡	藤原小はる	七越	小池しやう	信夫	魚里よし
花里	池田あさ	紫	阪下きん	小櫻	山田かめ
初紫	西川ふみ	小紫	西岡けん	可	小林かめ
壽	吉井てい	長山	岡本たね	末廣	黒川いよ

友江	上谷さく	魁	中小路ゆく	梅鶴	石川ふし
喜勢川	大島てつ	五月半	鎌田かね	阪本とよ	
○眞田樓		全 三百四十番屋敷			
若浪	伊藤さやう	小雛	大橋せん	若照	小林みね
若松	金辻すみ	若雛	寺田まわ	若種	高木たほ
若安	大川すみ	左近	芳賀りう	都	小倉はる
種龍	栗津てい	花鶴	吉名しを	種榮	上田かめ
種次	辻田なつ	雛子	廣田よし	君花	今井ゆき
愛染	日置いね	市松	内田あさ	雛江	淡野かね
小龍	藤本ひめ	玉尾	油田さく	種子	河野くま
壽	旗野はる	若琴	布川しか	若糸	中川花
雛鶴	柴田とで	花扇	細川うさ		
○勢陽樓		全 三百二十一番屋敷		伊藤秀吉	

壽	水谷 まつ	七越	竹内 ゆう	瀬川	山田 さく
白菊	瀬子 つね	勢周	小西 ふみ	若鶴	庄司 たい
鶴羽	石上 きよ	淺妻	番匠谷あさ	維鶴	明石 琴野
錦	淺井 竹代	若糸	市村 くに	若照	増井 いと
舞鶴	宮井 みね	紫	川上 うめ	長澤 重吉	
○青柳樓		全七十五番屋敷		色香	堀田くすゑ
美柳	竹川 いく	キ長	青木 きぬ	若妻	杉本 てい
揚羽	岡本 やす	若種	笹井 たね	大橋 しげ	
見	梅ヶ枝 且 しな	國松	富山 くに	一本	土居たみゑ
○澤山樓		全三百三十八番屋敷		朝香	稻葉 はる
榮山	伊藤こひめ	一榮	小島 かめ	玉琴	根岸 たま
若里	西村 みへ	澤山	森脇 きん		
小櫻	設楽たけよ	淺妻	金藤 たか		

十雛	難波 はつ	司	赤澤うつよ	若梅	垣田 ひめ
玉龍	織田 うつ	小菘	三谷 さく	高楠 しも	
○愉快樓		全三百三十七番屋敷		高房	平井 くら
綾雲	岡田 すゑ	小久	林 よし	君香	山内 さと
細	武田りきよ	梅鶴	松田 みつ	玉久	松島 きん
皐月	西村 さた	桂木	牛込かとり	みさと	木村 ひめ
久治	中井 たけ	初房	阪井 はつ	瀬川	瀬川 いと
若八木	西田 よね	若鶴	鳥井 ちよ	紀野 こう	
見	○千石樓	全三百三十六番屋敷		名山	稻淵 みよ
八重菊	小池 さく	此糸	清水 ひさ	甲子久	小笠原ふさ
維鶴	勝木 ゆき	江梅	村田 なつ	福助	高田 ひめ
春江	西田 まつ	花里	伊藤 しな	水江 たね	
○八幡樓		全七十九番屋敷			

此系 吉川はつ  
 みどり 木南りん  
 芳尾 末政さぬ  
 染治 吉崎金代  
 白糸 青木こちよ  
 玉浦 尾上とら  
 初菊 中山さく  
 百々山 堀内りん  
 玉菊 米中こはる

細

○寶勢樓

全八十一番屋敷

吉田定兵衛

初梅 山下とめ  
 初紫 横田こま  
 揚卷 小阪たね  
 櫻木 重成ひさ  
 若衣 川西もと  
 若勢 柴崎さみ  
 錦 横田とめ  
 初紫 藤原こりゑ

見

○成田樓

全七十六番屋敷

友成徳治郎

玉里 大橋ふしゑ  
 益榮 小出らん  
 若浦 酒井みつ  
 若系 藤井ゑい  
 梅ヶ枝 志水しま  
 一本 朝山かめ  
 若人 水野その  
 雲井 井上こよ  
 久柳 丸居さたゑ  
 操 蟹池りう  
 色香 桂つる  
 緑 渡邊みつ

若園 西本との

○多聞樓

全七十四番屋敷

南部新七

細

若雛 菱井ゆき  
 鶴羽 壺井くす  
 花里 多田ふじ  
 若里 河内みね  
 司信 中村くま  
 雲井 豊田さわの  
 三ッ扇 上野こう  
 津田久吉  
 若竹 大橋ひさ  
 若龍 川西たけの

見

○若松樓

全七番屋敷

津田久吉

錦 橋本い  
 若梅 津田とみ  
 玉扇 土谷やす  
 若春 大島りん  
 小花 山中てい  
 山口てい  
 琴司 神ふ

○山海樓

全七十七番屋敷

山口てい

眞砂 常吉 田中つね  
 道芝 若勢 黒田とく  
 如月 鷺尾まさ 紅井 芋玉とで  
 立花 中尾よね  
 かよ 石橋かい

○花柳樓 全八十番屋敷 大橋みわ

琴浦 勝見りう 小花 松田さよ 君龍 松本りう

玉米 中川もと 花鳥 本郷さく 朝香 瓜生とよ

白糸 今北やす 松枝 上野まさ

○長谷川樓 全番外十八番屋敷 長谷川九一郎

九重 廣川しき 錦 田隅たつ 眞垣 山本はる

若紫 河合なつ 宮城 下宮とき 田毎 石井てう

かしく 大舞いく 玉の井 明石たつ 愛染 吉田さめ

舞鶴 池上つる 錦糸 久保田しう 藤島 矢崎・すゑ

玉菊 江川はる つばね 土井とめ 夕霧 糸川くめ

揚卷 加藤ゑい

○東樓 全六番屋敷

花の枝 北村とらの 君糸 山田もと

千鳥 荒井つる 雲井 綿谷とみ

錦 山村はる 若波 森本ひろ 小浪 宮崎さく

立花 久南むめ 若波 森本ひろ 雛鶴 鳴神ゑい

○牧野樓 全二百六番屋敷 岩本由治郎

壽 島田しけ 錦 西山とり 色香 稻田ぬい

玉衣 荒木げん 全六十七番屋敷 加納まつ

○三ッ村樓 全六十七番屋敷 花衣 太田ふゆ 壽 櫻井ひで

園江 島田その 小峰 生谷みね 朝妻 島田たけ

八重菊 岡村さやう 梅の井 大飼むめ

妻次 山崎とく

○布引樓

全二百二十五番屋敷

岸本よね

(九十二)

初梅 杉本むめ

玉菊 池田さく

重松 吉崎しげ

若人 是友てつ

重岡 太田八重

菊の井 山本さく

野々松 中垣たけ

花の井 足立かな

色香 林のぶ

○勢州樓

全六十八番屋敷

川北静一

瀬川 庄野とら

芳鶴 小林たか

若梅 磯貝やぶ

墨染 三笠ふゆ

錦糸 松澤ゆう

司 太田かめ

薄雲 松本はな

花鳥 前田みつ

吾妻 緑谷さく

久形 細目むめ

全二百五十番屋敷

高田嘉助

○中國樓

全二百五十番屋敷

高田嘉助

玉菊 赤松さく

若子 森ゆく

榊榮 中川ちやう

若玉 是兼こう

重岡 田中しげ

若梅 島澤らく

小房 原田いし

若菊 渡邊ちよ

若石 大西ちやう

色香 三吉つる

○山田

全二百十三番屋敷

山田一馬

三代吉 安部みの

若松 堀口まつ

巴 藪田みつ

三ツ木 木下とく

鶴吉 宇治田芳江

錦 渡邊まつ

一榮 増田みつ

壽 大森かつ

春吉 足立むめ

菊の井 小幡さく

○西村

全二百十七番屋敷

西村槌藏

玉里 花野やす

若君 小林ため

若力 桑田ゑつ

小雛 藤原ふじ

司信 淺沼けしめ

玉袖 長濱さたゑ

梅ヶ枝 橋本とき

紅梅 渡邊さわ

花の井 木田こう

○中川

全二百六十七番屋敷

中川ちか

小松 上村まつ

小竹 島村たき

福惠 眞崎ふくゑ

菊松 江口もせ

重鶴 石田しけ

若種 神崎せい

(九十三)

○三 榮 樓

全二百廿六番屋敷

植田 とみ (九十四)

若人 杉本 よね

若梅 岡本 うつ

春江 岩田 はる

松ヶ枝 池東 しげ

若榮 歡崎 あさ

光江 花房 りへ

若糸 中西 つき

奈良枝 藤原 なを

○阪 本

全二百四十五番屋敷

阪本 捨吉

小高 石橋 たか

綾糸 大津 せい

菊松 延原 次武

春子 木田 はる

見雪 改發 せい

小櫻 角森 しん

小鶴 田島 つる

○菊 本 樓

全二百十五番屋敷

北野 さと

若浦 目黒 いま

若人 佐々木 ふま

若糸 小松 いわ

朝妻 永部 たか

泉川 竹内 てい

巴 木村 さと

○柴 田

全二百四十九番屋敷

柴田 一雄

白糸 小川 きく

若常 井上 つね

薄雪 山田 のぶ

此糸 津田 たね

巴 石原 よし

久方 梅本 こま

金人 涌田 たつ

小米 山本 よね

○藤 井

全二百九番屋敷

藤井 きりゑ

小春 永良 しり

若梅 長岡 きく

愛染 橋爪 たつ

朝妻 石池 ふさ

友香 岡田 とも

小玉 福田 小むめ

朝子 藤井 いさ

若人 窪田 もと

小雛 大石 とみ

○甲 子 樓

全四百三十七番屋敷

清水 こう

若梅 山内 たう

朝香 内藤 むめ

鶴江 中村 つる

海衣 福島 なを

若富 谷口 とみ

小勝 八木 じう

○戎 樓

全三十五番屋敷

勝部市 大郎

久榮 飯田 ひさ

八重絹 坂井 うね

染ノ江 生島 こま

糸若 松浦 つね

房鶴 松本 すて

勝ん 中谷 かね



○門 脇

全二百十番屋敷

門脇藤治郎

光江 是兼 ひとめ

色香 小久保よし

菊江 余部 やく

重尾 太田 いく

梅鶴 角野 ひめ

若春 二宮 はる

○杉 浦

全二十七番屋敷

杉浦品藏

八重子 大見 くま

八重松 吉野 いち

小糸 住吉 しな

○豊岡 樓

全四十八番屋敷

上田 實

若君 寺井 たい

米吉 松井 かね

兼人 籠田 かね

駒路 餅田 こま

小三 竹中 とも

白菊 小川 さく

若系 米山 やゑ

小三 竹中 とも

白菊 小川 さく

○玉 崎

全百八十三番屋敷

玉崎 たみ

小玉 小山 てる

玉川 三室 なか

松ヶ枝 稻田 さつ

小春 島 はる

小花 土谷 ちか

國松 戸田 まさ

玉菊 井田 こま

小花 土谷 ちか

國松 戸田 まさ

○小愉快樓

全二番屋敷

森田利中

花鶴 原 けう

愉快 國松 こう

一二三 山田 さと

春香 谷 いと

錦 松岡 ちよ

若玉 藤谷 ゑい

常盤木 鳴神 とらの

雛子 岡 まさ

若玉 藤谷 ゑい

○南越樓

全三百五番屋敷

竹内三郎

常盤木 鳴神 とらの

雛子 岡 まさ

若玉 藤谷 ゑい

ことさ 宮本 はる

白菊 國友 やす

東雲 東鬼 くに

○高砂樓

全廿三番屋敷

松本音吉

若梅 岡村 りよ

若玉 中野 きん

壽 濱西 すゑ

若子 宇田 とも

小蝶 西口 やす

○竹島樓

全三百三十一番屋敷

信貴 甫

妻菊 魚谷 とよ

朝子 上坂 ちる

小菊 米澤 さくの

○福田

全八十二番屋敷

福田 ぶく

竹松 河本 けた

若竹 西海 是る

玉吉 鳩岡 ちう

一鶴 岡崎 うの

初梅 周傳 せん

○金勢樓

全二百三番屋敷

久保佐吉

立花 森谷 まつ

一龍 山本 是る

若梅 河崎 ひめ

三好 西尾 やな

喜勢 森谷 きの

白糸 佐々木 ひめ

一本 百枝 小はる

小鶴 國岡 ひやく

○石原

全二百四十三番屋敷

石原米吉

若竹 稻井 こたけ

小八重 津田 やす

紫 武村 やす

紅梅 鏡 しう

小萬 折口 しよ

妻琴 高田 いし

小米 山田 いと

○金太樓

全六十六番屋敷

濱田千代

すゑ 片山 すゑ

菊江 寺内 うね

福松 家懸 ひめ

○小松樓

全八十二番屋敷

楠 たね

小芝 近藤 とよ

小金 荒木 うめ

瀬川 服部 うな

花里 高谷 ひさ

君鶴 岡崎 まさ

壽 神田 しき

巴 高木 かね

○末富樓

全百七十六番屋敷

吉田 たみ

白糸 高田 たか

榮鶴 森田 さい

若鶴 増田 さゑ

立花 蔭山 すみ

○服部

全百七十三番屋敷

服部熊藏

小櫻 海神 みき

若種 磯野 こう

若玉 佐野 なつ

小雛 中津 つる

○古川

全二百四番屋敷

古川寅吉

勇鶴 中嶋 ため

若鶴 辻 みつ

若鶴 尾崎 しけの

若糸 小西 すゑ

玉花 成瀬 たけの

千代春 三野 ちよ

梅子 奥村 はる

○前田

錦 服部 ゆき

全二百七番屋敷  
かしく 松井 ゆき

前田 こよ

若糸 新延 はる

小糸 前田 つる

○天池

小福 尾松 こま

全二百六十五番屋敷

天池 徳兵衛

小櫻 幸野 よう

紫 山内 さの  
雛鶴 胃甲 まつ

米吉 野上 よね  
兼吉 神崎 かね

徳鶴 對馬 とく

○紺田

若照 葎 かん

全二百四十一番屋敷

紺田 ふさ

朝妻 高田 はる

若糸 武田 いと  
白菊 齊藤 しづの

若春 川口 こはる

○富田

小櫻 井上 ふさ

全二百三十八番屋敷

富田 とよ

富鶴 野波 のぶ

富榮 山中 はやの  
梅ヶ枝 田中 みの

小春 松尾 しげ  
正鶴 井上 みと

○眞柴

高砂 今津 ふん

全二百五番屋敷

眞柴重郎兵衛

若春 澤野 しげの

錦 山崎 ゆき  
紫 前海 ゑい

巴 石田 ゆき  
小徳 南江 つね

菊江 井上 さく

○大碓

久鶴 薄田 りき

全二百壹番屋敷

紅澤 つる

八重鶴 高原 よし

友鶴 中村 よし  
玉鶴 村上 さくよ

若鶴 近藤 とめ

○繁喜樓

若照 廣海 ゑい

全二百四十六番屋敷

井上 ちゅう

薄雪 龍田 いし

戀衣 前島 すみ  
若梅 阪本 なみ

政次 網干 こう  
正妻 酒井 なつ

○南繁喜樓

紫 藤重 ひで

全七十九番屋敷

小澤 嘉吉

錦 神崎 しん

玉菊 横田 菊猪  
兼人 森田 よね

朝妻 倉垣 てる  
小櫻 大久保 うね

○加藤	藤	全 百八十四番屋敷	加藤トよう
久形	竹中 るい	浦路 奥野 まさ	桂 藤本 せん
若衣	戸田こよし	八重八 荒川しらの	瀬川 中谷 たら
○菅原	原	全 三十七番屋敷	菅原 ひさ
玉鶴	住吉 たま	八重松 黒瀬 幸	薄雲 奥村 よね
小櫻	中村 いそ		
○永昌樓		全 二百四十二番屋敷	中川 こま
妻榮	今井 さく	色香 天野 ふさ	若鶴 稻城 しん
○東海樓		全 三番屋敷	岩崎 舜二
朝香	國松 ひで	米鶴 木村 おを	久菊 平井 たら
○新愉快樓		全 二百九十九番屋敷	船井音五郎
小春	植木 はる	小龍 村上 すか	住江 細井 いそ
紫	守田 まつ		

○山本樓		全 七十九番屋敷	山本 たま
駒吉	木村 かつ	白糸 池田 つる	松ヶ枝 喜多 まさ
緑	岩田 ゑい	鶴榮 鳴神 つる	小春 岩田 たみ
○鼎樓		全 四番屋敷	十文字 よね
紅梅	西村 こと	夕霧 柏 しか	數榮 村上 とき
壽	津島 たら		
○三浦樓		全 二十九番屋敷	日根野谷 こと
糸枝	松井 いとる	梅吉 吉田 まつ	千代香 竹内 いの
○新八幡樓		全 百八十一番屋敷	楠見房 の
梅香	關本 ひめ	常香 竹本 かく	久枝 牧田 かね
○鈴木	木	全 三百十二番屋敷	鈴木 健吉
小萬	高木 よつ	きく 石本 さく	
○植田		全 九十三番屋敷	植田 さく

松ヶ枝	林	いち	若菊	黒田	とら	ア	ん	小田原りん
伊曾	植野	いと						
○淺井			全七十七番屋敷			淺井	よ	つ
若豊	狗巻とみる		若勢	仁木	りく	小榮		中村よね
小房	山本ふさ		吉野	岸田	きよ	小花		長谷川はな
○中村			全百七十八番屋敷			中村		福松
若富	漁とみ		初菊	大森	はつ			
○末廣樓			全百八十番屋敷			大原		さし
久形	玉田	うし	一本	兒玉	たつ	千代子		葛城よし

藝娼妓細見終

◎おまげ

娯案内

看客諸君の内にも大の通人ありて評者よりも猶よく何かと御承知のお方も多からんが又中には未だ兵神の花柳を遊びたるものないか方も無きにしもあらず別して間ひとを隔たりたる人、旅がけの人達には不案内の君たちの得てして有ものなれば茲はホレノ大畧だけを述べておきます。

抑も福原中本店と稱ふるものは………

- |      |      |      |      |       |
|------|------|------|------|-------|
| ○色葉樓 | ○松浦樓 | ○眞田樓 | ○成田樓 | ○澤山樓  |
| ○愉快樓 | ○青柳樓 | ○寶勢樓 | ○花柳樓 | ○八幡樓  |
| ○勢陽樓 | ○千石樓 | ○多間樓 | ○山海樓 | ○長谷川樓 |
- なりの内長谷川樓の多間通より少し這入りたるどころにあり其余は皆仲の町の両側  
あり、又中店と呼ぶものは………
- 若松樓    ○東樓    ○勢州樓    ○三ツ村樓    ○三榮樓

○西村樓 ○布引樓

等なり其他は皆小店と呼べり、併し乍ら大店の花魁必らず美人揃ひと云ふべからず小店必らずしも醜婦斗りとは申されず、大店にも醜婦あれば小店にも美人ありさりながら大店中店に比すれば小店の品格幾等劣りたるや見受らるれば従つて美人も醜婦に見へ醜婦も猶よく奇麗見ゆるも是又致し方なき次第と云ふべし。

揚代の義は大店で五十銭が通例なり、二階仕舞はその二倍(則ち金壹圓)仕舞切はその三倍(則ち金壹圓五十銭)として通例五十銭の口は四疊半乃至六疊のまはし部屋に入られ二階仕舞にあらざれば娼妓の部屋に入るとを得ず仕舞さりとは一夜娼妓を買切の謂として如何程も馴染の客が來るとも他又まはしを取らせざる法なり、中店は揚代四十銭にして小店は三十銭を通常とす、又娼妓の店を張る時間は大店は夜の一時まで中店は二時まで小店は三時までとす、娼妓の部屋とて別し飾り付たるやうにも見えずたい六疊か八疊の一室きりにして次の室の設けなどある樓は至つて少なし、娼妓を連れて芝居或は物見遊藝などに行かんとするものは一々出鑑札を受るなどの六ツウしき

け ま お



といせず只仕舞切の揚代さへ拂はばいつでもらくと知らるべし。

橋通なり兵庫新川なども大ていは福原に髻髻たるものなれば茲は省く。

藝妓の方に至つては名義斗りの藝妓でも逆ても何でもやるといふものもなく或は端唄のみに達してをれば外のとは一つも出來ず適々清元だけの上手でもまづ義太夫はお斷りと云ふ風なれば有名無實といふても敢て言ひすぎにはあらざるべきか、ソリヤ中よはヒヨット有るにもせよ實に少數にして一般上より申すときはまづ腕の藝よりも腰の藝が肝要だと思ひをるの感あり併乍ら世界は廣し兵庫神戸は狭し其狭い兵神間よして——是を諸方の掃溜め場所として——見れば又頗る見所あるべければと隨意よ招いて娛愉快なされ。

遊客初君心得

扱皆様も御存じの如く娼妓を買ふたり藝妓を招いて遊んだりするの、無論御愉快すじでなさると……日頃アクセクとして働きクシ〜として心配したるなぞいらく〜のうちはらしよ行くとおは吾も人も同じとなるべき、然るに口にはうさやらし〜と言離

け ま お



して毎夜のやうに行くものもあれど、かくては段々と馴染に従ふて行くと思ひも染ぬとの起りて初めのうさはらしも終には心配となるものなり其心配も初めの内は些細なるにても濟むべけれど追々よは煩惱の度を進め親がりのものはお目玉を頂戴し、妻あるものは一家を亂し、主人もちは足袋屋の看板、官途に付くものはおはらひ箱と夫れ相應に身の置所なきやうななり、トドの局りの身をわやまるとの出でくるものなれば恐ても猶謹むべきとにわらずや……など鹿爪等敷申すも何となく野暮らしければ言葉を轉て少しも遊ばぬ人に一言申しおかん……凡そ人の此世は生れいでくるより死ぬるまでの年は僅うに五六十年にして七十年は極々稀なり然るに其五六十年の長歳をいつも虫食たやうな顔をして四角張たとばかりを言ふてゐては氣も鬱ぎ自然陰氣になり、従つて病氣など出来逆も長命は出来ざるものなりされば又適より解誤の花ちどながめて沈みま心を陽氣よ浮かすとも大に身体のためになるものぞかし、同じ一生の内にもゲタゲと笑ふて暮すかクシク泣いて暮すか、何方が良いかといへば矢張笑ふて暮す方に手を擧ぐるもの多ければ僅か一生の内一度も浮たの檢

け ま お



快をしたるとなまでは、自分一生の大損のみならず、死しての後閻魔の廳で調べを受るときは青鬼どもや黒鬼の前で赤はじをかかべければ能々後先を考へてたまには氣散するも保養の一なるべきか……

夫れから遊ぶとよ付て皆人々の好むところ或はソソリとしたのを好むもあれば或はドサクワイくとした座鋪を好くものもあり、皆一樣ならざれば其方法などは各自適宜になさるがよろし、けれども中よの酒興に乗じて無暗に藝妓あり娼妓ありの腹をこそぐり、又は其情夫などの事を、遠いところから言ひ廻して之れをいじめなどして粹がるものもあれど、これ自分免許の粹にして公然に出せる粹にあらず、却て野暮とそしらるゝのみならず折角面白く浮いた座敷を自分に沈めるやうなものなり、尤も彼方は人の機嫌を取るのが商賣、沈んだ座しきを浮すのが役目あれども、さんば商はいじやて……役目じやて、自分の氣に入らぬとをのみ言はれては腹も立ち、かなしくもなるものなれば、従つて待遇なぞもたい外面ばかりよあり、心底うら出る待遇はあくなる道理なれば、よく考へて彼にも面白くさせる方が、何ぼうか客となる身

け ま お



の徳あらんか、これ第一に心得べきことなり、付てはこれより藝娼妓普通の心得をあらかた書置ば、夫れを讀て彼等の心掛へこんなものか、ナール程と五得心なされて此方よも其心して遊べば、余りやばめいたるともなく何時も面白可笑く遊べます………

娼妓諸君心得

浮川竹のうきふしと情を商ふ娼妓は、いとわはれに果敢なきものゝあるまじ、左り乍らソハ我身の宿因なり、樂みあれば苦しみあり今の苦しみ又々へつて玉の興よも乘る樂みの原因とおもひて、お客なり親方を大切に、信めくしく勤して、必ず色慾に耽り密夫狂ひなせぬやう、怠りなく店の男衆やら、小女郎に至るまで、ひたすら親睦を旨とし、言葉優しく大衆よ可愛がるゝやう心がくれば、自然と造物主の冥助よて思ひ掛なき、僥倖の出でくるものなれば、夢々勤めと云ふことを忘れず我儘氣儘をすべからず。樂しみなくては勤まらぬと云ふ諺もあれば、あながちに情男こそへなど云ふにあらず、其情男いかにも信實にして、未の見込さへしかと見とむる以上は随分

時としぎよ依ては、未の契約なぞするもよけれを勤めの故障にもならず、我身よ借鏡の出来ぬやう、又其情男よも可成金員をつりはさぬやうにまで互ひよ意氣地を立て通すをのみ心がくべし、併し今の世は兎角に誠あるもの少くして、大ていはホンノ當座の樂しみと思ふいたづら人多ければ、假令如何程口さかしくいふとも、ウツカリと乗るべからず、欺まされとまでよく欺まされるとのみ多ければ、兎にも角にも、我身を謹みかゝるが専一あるべし。

今は昔かようのところに遊ぶ人達は、随分金員もされ放れもよくまさ散らま馴染となれば中々に頼りにあるものなりしよ、今の遊客大ていは薄情になりをれども、ソハ時世のうつりうはりよつれ、人の心もかはるものなれば、一概に夫れをにくまず、何事も丁寧にしていつくまでも来るやうに勤めるが娼妓の巧者といふものなれば、假令客が如何様つれさいとをいふとも、言へば言ふはどうも持ち込むやうにし、此人は頼りにあらぬゆゑどうでもよいなどこの者を起さず、何分にも客を取留めるやうせねば勤めする身の耻辱と知るべし。



勤めと云ふとは閨中の交りのみと心得べうらす、客と妓樓の氣取りするが勤あり、客の撥嫌は取易く、妓樓の氣取は六ツかしいものと心得居ると肝要なり、左りとて客の氣取は易きものと思ひても、夢々怠るべうらす、是れ怠れば從て客の減るは當然の道理なればなり。

初對面から、余り馴々しくいふも悪しく、又房中情しみするも誠にあしく、是れいかにとなれば都て客といふものは、粹も不粹もおしあへて、十中の八九まで大ていは妻のないものあり、よし又女房子のあるものが遊びよくるにもせよ、總て助印のものと心得、彼れお客の煩惱をばらすすが役目とおもへば、左のみつらきともあらざるべければ、十分客の氣入るまで勤むべし、若し然らずして不勤なとするときは、假令如何程の美しい娼妓でも次第ぐは客足遠くなるものぞうし。

いまだ色情の譯しらぬ赤襟をばはづうしいのと、慾氣のないのどが見どころにて、却てそれが可愛らしくも、おくゆかしく見ゆるものなれば、左まで上手を盡すよ及ばず、されども年既に十七八より廿四五といへば、色盛りとも言ふべき時なれば、十

お ま け

分にせりふなと心得ねば、尋常で客を得心させるとは中々に六ツかしきとなり、然るにはづかしいのが一ぱいの赤襟が、ベチヤくどせりふなと矢鱈に言ひ、色ざうり娼妓ざうりのものが却てアンケヲカンと伏見人形みるやうよしてゐるものも間々あり、赤襟のせりふ付のたしも、色盛の娼妓にて無口なるも自然と客受あしくなるものなればよく心得べきとなり。

總ていつにても客より先へ寢るといふとは廢止すべし別して初會の節なとば心の知れぬ客なれば、如何な惡洒落をしられるやらしれず、また悪い評判は直ちにたつものなれば、假令客は寢ることも可成は寢ぬやうにすると、是れ又心得べき一つなり

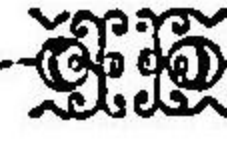
娼妓は大てい始めよは少し大切に勤てゐるが、ハヤ再會となれば油斷をするのう、トント不勤にする風あり、これ誠に勤めしらすのるかなるとなり、初會よりは格別よ打解け、成るだけ張込んで待遇やうにすべし、若し然せずして、客の無理もさうす、本意をさやうなふりをすれば、客は自分の悪いとは棚にあげ、兎角娼妓の惡評を言ふものなれば如何程無理なとといふとも、其日の廻りあはせと思ひ、よく心得を

け ま お



らねば自然と名もあち、客足も遠くするやうのとあるべし、  
 身柄の低い客はど一増一減に旦那あしらしにすべし、左すれば相人の方よも聊か心を  
 置ものなれば、自然とおもひぬせりふもなくなり、相人の顔もつふれず、われも意地  
 をもたれず當りさばりなう濟むものあり、斯様な時のみならず平常にも、物言ひなど  
 によく氣を付け、人に安ッホッ見られぬやうにするとこそ心得べきことなれ。  
 若し途中にて馴染の客に逢ふとありとも、場合悪しくば可成聲をうぐべからず、かゝ  
 る場合には直に一筆書いてやるべし、客はまことにうれしがらるものあり。  
 都て火急の用事などあるときはあるべく、紅筆にて書てやるべしこれ又客を喜ばす  
 秘術あり、  
 馴染の薄いお客には約束は頼むとも、金錢の無心をいふとなかれ、又深ふなじんだ客  
 なれば、金の無心はいふとも日柄を頼むべからず、  
 聊かにも客の手より物をもらひたるときは、直ちに妓樓へ答へ置べし。  
 馴染の客へ出す状を人より聞いてもらふべからず、

け ま お



同じ仲間うちにも到らぬ娼妓と照らすとなうれ、又たどひ全盛なりとて決して恐る  
 ととなかれ。  
 一座の娼妓と俳優の話なり、其他何ごとによらす客の顔色を見て、滅多まいやがるや  
 うのと言ふべからず。  
 客の羽織や着物は丁寧にあたふべし、革庫紙入など所持のものよは手をかくべからず。  
 起證の書ども入黒痣はすべからず、するの約束のするとも死ぬ約束など決してすすべ  
 からず。  
 指輪などよわが紋はつくるとも、指夫の紋などは附くると至つてあし。  
 寝間に客が物を忘れなどして歸らば、早造機へ渡しかくべし。  
 此外種々と心得べきと澤山あれども、大ていは斯様ものなれば、余は臨機應變に夫々  
 自分の伎倆よて勉強すべし。

藝妓諸君心得

白拍子の余流を藝妓といふ、元と白拍子といへば遊藝は更なり、多く手跡も拙ながら

か ま け

す、歌よも達し女の道をも何一つとして心得ざるとなれば、忝なくもやんごとなき御方様がたの寵遇を蒙り、或は側室となるも多うりけり、中興以來東都西の都酒宴の席にハハハハ、酒興をそふるものを藝者と云ひ、或は藝子といふ其頃よりして愈々藝者の品行下り、昔時の白拍子のうげは何處へやら、僅に三味線位ひ弾き鳴して、これが白拍子の余流なりと、獨り得心して肝要の商賣道具は、ホノノ遊客をこのかす器械と變じ、をさく下等娼妓輩にも劣れる舉動をなすものもいと多き、誠に嘆くわしき限りならずや、然れば藝妓諸君にも往昔の白拍子のことを思ひて、藝道は勿論婦人一ト通りの所作事には、十分に勉強し情を鬨ぐとは成るべくこれを廢し、以て藝妓の藝妓たるの本分を盡さんと心得るこそ肝要なれ。

愉快に来る客はいづれも一癖あるものなれば、夫々座敷の体裁を見て之れを待遇し、始終間の扱ぬやう席のしらせぬやう心がくべし、假令標致が如何程よくても、お情事の鈍い、氣轉のさうぬものでは藝妓は勤らず、左りとて余りチャヤ〜と云ふのも何だか雀の集會めいて容うけ悪しければ、万事抜目ささやう心を配るべし。

か ま け

何れの席に招かれても、初めて見ゆる客なれば、成丈荒々しくせず、何事も慇懃にすべし、又合妓あるときは無暗にはやりて、老妓株を措きひとり進んで客をもてなすやうの事せず、何事も姉藝妓の指揮を受くべし、初會の席にてはよく符蝶、隠語を出たがるものなればよく〜謹むへま、散財好きの客よりぎり、お辨慶の多きものなり此お辨慶と稱するもの誠によく〜氣を付けねばならぬものなり、心の内には何んの……と云ふ氣よてをるとも、目の前にてはあんまり客との差別を付くべからず、若しこのものゝ氣に入らぬとあれば、客へ散々に悪口をふきこまれ、客は對して何のおちどもなきに、終は仕損するところべし、左り連余りお辨慶ばうりをもたせば、客よいらぬ心配をさせ是又機嫌をそこねるものなれば、お辨慶のあるときなどは、殊さらによく心を配るべし、文の書やうは種々と流義よりて違ふものなれども、左のみ六つうしく時代めいたるとは書す、只用事のみをうくこそよけれ、抹式とう相庭商人さんどのところへいよく氣を付けて忌言葉をかくべからず、假令はどんじりは損しにうよふゆへおもひる〜

と云ふやうなとに氣を付べし、

報間は差し込むとも、必ず俳優は招くことなかれ。

馴染の薄い客に衣裳の無心は云ふとも、金子の無心は云ふべからず、深う馴染た客よ

金子の無心は云ふとも、衣裳の無心は云ふべからず、

聊かよても客よりものをもらひたれば、早速茶屋へ答へたぐべし、

假令流行妓と同席するとも恐るゝよたらず、いたらぬ舞妓とて侮るとなかれ、

俳優の寫真なり客の手紙を入れたるものを、うれしう持ち歩くとなかれ、

保養藥、妻やうじなどはたやすとなかれ。

みだりに喰物に目を付るとなかれ。

未だ藝妓の心得べき祝日の心得と、紋日の心得といろいろと細かくうけば澤山に

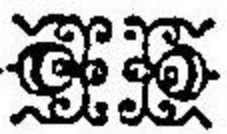
て、数かぎりなきほどあれども、ソハ茲も省きたき、只其肝要なる事のみを習並べた

れば、よくくわちはひて此余の事々各自の氣轉によつて手おちやくれば、次第々

々よヒイキの客多くなり従つて末は安樂の身となり、結構よ……心配なく……暮



せるやうよあるとうたがひなし。



おしおひ

◎附 録

左の都々一は友人浮連社々員外二三の諸氏より編者に送られたれば茲にこれを附録として掲ぐることはなしぬ。

これび藝娼妓評判記てふものを著はされしと承り聊か餘興を添ふるよすがともならんかと浮たくの浮連社茶員が兼てもものせし百々逸の其面白さもの斗りを差送り候まゝ餘白もあらば御掲載あらまはし

豊雲軒野人

百 々 逸

○遊客心意氣百々逸

身上りされてはツイ登りつめ後ちよや財布も奴子いか  
花をさかせた浮氣なはては乳母の在所で冬ごもり  
夢で湯水よつらふた金も覺めりや風呂ゆき銭もない  
夫からそれへと乱ぐい悪所さけいはしどの二階好き  
酒の上からくどいて見たがまくら勝手とまりむけた

富士野山人  
豊雲軒野人  
全  
權兵衛恨若  
被好亭小丸

百 々 逸

外よはあしが又山々もころおとむしん狀  
忘れちやいやたど小指にもろた指輪を隣りの指へさす  
かけた手管もしりこそばいあど幕と聞いてから  
酒も飲めないさかなも食へぬなどところく床いそぎ  
逢てうれしい夕邊よかへて今よいは辛氣で一人り寝る  
お近い内とは勤めの義理よたき出されるとも知らず  
ふさぐ顔色見てとる客がしやくを紙幣でおす氣轉  
となり座敷へ知らせてやりて未練に障子へあけるあな

○ ひげも眉も入の字なりでねこにあろてる八十八

自惚亭能弄八

○藝妓心意氣百々逸

情夫を待間の辛氣なものとしんさよあまつた獨り言ト  
情夫よよぎられ手先がゆるみあまい指輪が證據もの

豊雲軒野人  
宇宿庵惣照

未練ながらに引くにも引けず袖ないわうれと出す高帽

眉毛おとした男にこつてまゆげ生やして出るうさ身

化けておん座のはつものめかし剛い眉毛の二番生へ

姉はん夕邊のれそわれ工合三日はあせんゆめらしい

義理で別れて居るいりわけを知らぬ他人がやせを問ふ

義理あるお客の義理をば欠て不義理をお前に立る義理

うくすシヤツプを出す間の中がのこる未練の五分間

風鳴きでもさかない猫のみせでしよんぼりかじる三味

好きのもらいとさつした三味の糸までゆるんで風鳴き

○

まつ夜しん氣に新聞出して余所のあくしよに増す苦勞

連れて戻つておらんせさんの格氣はあちらがせぬ様に

雨廼家蛙戲

宇筒庵惚照

東 雲

雨廼家蛙戲

東 雲

被憎亭 幸

浪花 蘆好

權兵衛恨若

浪花 蘆好

花川堂祐子

無粹庵隊長

百

一生たよりの御主の體離れらううか葛籠

痴話も苦説も最ふ濟んだあど枕ならべてとも笑顔

夢とおもひし首尾さへあるよ首尾とおもたは夢らしい

たまの首尾さへ外れるゆゑにかたい指輪も抜けそうな

獨り汲ひ身は意氣地や義理よなれば素人よ無い實情

とげて百薬ふたりが銚子合してイチヤク飲む寢酒

うそのなみたで見送る客はかねに未れんの別れざは

待てどくらせせオー辛氣樓極めた約束

お内か是れじやと返した晩よ鬼が禮に來た夢を見た

首尾とおもふて返へしたものを主は邪推でするりんき

讀でる粹書が我身にわたり苦界はこうもとぬらす本

浮連社員外 松月

同 布袋

豊雲軒野人

横寝軒竹麿

宇筒庵惚照

雨廼家蛙戲

權兵衛恨若

花川堂祐子

權兵衛恨若

助六軒磨夫

雨廼家蛙戲

宇筒庵惚照



摺子木お客へ義理から出てる隣りへ摺り鉢貸した氣で

東雲

(百二十四)

苦界のうへではポツポの脈で好きとさういひのさち加減

自惚亨野弄八

炭にせせつて苦勞はすれを以前は私しもはなすさ

豊雲軒野人

實で無い寶賣ふがため身揚りするのもうその實

自惚亨野弄八

悟氣をころろこの米高よ燃しかねてる釜の下

一杯庵醉照

主が來るうと居待の月見僧や今宵は月ばかり

浮遊社員外 水也

神藝娼妓評判記 大尾

廣告

○神藝娼妓評判記

第二編

附録 藝娼妓年齢入細見  
新作心意氣端唄  
料理屋遊廓案内

右の第壹編に漏れたる各檢番藝妓並に各遊廓娼妓諸君百余名に就て其姿色くら技藝に至るまで一々遠慮會釋なく其内幕を搜り詳細に艶評を下し附録として第壹編に預りせる藝娼妓年齢、掲籍年月を詳記し猶當時粹社會有名なる諸君の新作心意氣端唄數十と兵神市内料理屋遊廓の名高きものを撰り抜き料理塩梅から、待遇の巧拙、直段の高廉に至る迄悉く評判を附したる案内をも記載する筈なれば藝娼妓諸君の申すよ及ばず通人粹客の諸君も是非一讀すべき冊子なれば發賣早々御講讀の上本書の面白味を知り玉へ

附白 著者の参考を供する爲め意見を述べんと思はるゝお方は御勝手次第に私評を作り發行取扱所へ寄送下さるべし、端唄なども全様……

發行取扱所

兵庫東出町中組四十一番屋敷

粹草堂



摺子木お客へ義理から出てる隣りへ摺り鉢貸した氣で  
苦界のうへではポツポの脈で好きとさらいのさち加減  
炭にせつて苦勞はそれと以前は私しもはなすこと  
實で無い實賣ふがため身揚りするのもうその實

○ 悋氣とてろろこの米高よ然しかねてる釜の下

○ 主が來るうと居待の月見憎や今宵は月ばかり

(百二十四)

東雲

自惚亨野弄八

豐雲軒野人

自惚亨野弄八

一杯庵醉照

浮連社員外 水也

神藝娼妓評判記 大尾

廣告

○ 神藝娼妓評判記

第貳編

附錄 藝娼妓年齢入細見  
新製作 心意氣端見  
料理屋遊廓案内

右の第壹編に漏れたる各檢番藝妓並に各遊廓娼妓諸君百余名に就て其姿色くら技藝に  
至るまで一々遠慮會釋なく其内幕を搜り詳細に絶評を下し附録として第壹編にお預  
りせる藝娼妓年齢、掲籍年月を詳記し猶當時粹社會有名なる諸君の新作心意氣端見  
數十と兵神市内料理屋遊廓の名高きものを撰り抜き料理塩梅から、待遇の巧拙、直段  
の高廉に至る迄悉く評判を附したる案内をも記載する筈なれば藝娼妓諸君の申すよ  
及ばず通人粹客の諸君よも是非一讀すべき冊子なれば發賣早々御講讀の上本書の面白  
味を知り玉へ

附白

著者の参考と供する爲め意見を述べんと思はるゝ方は御勝手次第私評  
を作り發行取扱所へ寄送下さるべし、端唄なども全様……

發行取扱所

兵庫東出町中組四十一番屋敷

粹草堂





